# 徳島の剣道

第 10 号

徳島県剣道連盟

第２回全国高等学校剣道選抜大会第３位に入賞した富岡東高選手団

平成５年度全国中学校選抜剣道大会出場市場中学校選手団

第14回中倉旗（内閣総理大臣杯）争奪剣道選手権大会第３位入賞した平野選手（県警機関誌うずしを提供）

第６回全国健康福祉祭京都大会出場選手の皆さん

# 巻頭言

徳島県剣道連盟会長　堀江幸夫

「東四国国体」は、本県剣道史上初の総合優勝という金字塔をうちたてて、成功裡にその幕を閉じました。

思いおこせば、8カ年という長丁場で幾多の筆舌に言い尽くせない困難もございました。

香川と本県のいずれに剣道会場をもってくるか、国体剣道史上初の二会場開催、競技成績の目標、強化費、運営費の準備等よくこれらを克服して所期の目標を達成することができました。

これは申すまでもなく、会員総参加による総力で今更ながら「いざ、鎌倉」の時の連盟の底力に、自信と感動を一段と深くいたしました。

この底力のある限り、連盟の前途は洋々たるものでございます。

会員の皆様と「出会い　競い　そして未来へ」のスローガンを今後も高々とかかげて、21世紀へ更なる飛躍を期し、一致努力をしてまいりたいと存じます。

# 目次


巻頭言……会長　堀江幸夫　1
わが郷土の剣豪紹介……4
郷土の誇り　藤川・太郎先生……6
庚午事変（道楽話として）……9
阿波における関口流剣術の伝承と武田神仏塾について……14
剣豪紀行　堀部安兵衛武庸……17
無駄打ちのこと……19
人物紹介……22
剣道随想……28
徳島の剣道（各ハートからの報告）……30
国体剣道成年二部優勝……31
国体少年男子国体に参加して……35
国体少年女子国体の思い出……35
国体強化に参加して……36
国体の民泊を引きうけて……38
インターハイに出場して……39
全国高等学校剣道選抜大会二位に入賞して……39
四国大会に出場して……40
第23回全国中学校選抜剣道大会に出場して……41
全国スポーツ少年団剣道交流大会に出場して……42
高齢者剣道大会等に参加して……44
全日本居合道大会……45
中倉旗（内閣総理大臣杯）剣道選手権大会に出場して……46
平成五年度各種講習会参加状況……47
平成五年度戦いの跡……57
平成五年度昇段者名簿……60
平成六年度剣道・居合道昇段審査学科試験問題・解答例……86
平成六年度徳島県剣道連盟役員一覧表……89
平成六年度徳島県剣道連盟行事予定表……91
平成六年度段級審査実施計画表……92
徳島県剣道連盟審査資格・審査料等……93
国体費に関する報告……94
編集後記……



〈表紙〉
題字　堀江幸夫徳島県剣道連盟会長
写真　徳島新聞社提供
徳島新聞平成五年十月二十九日朝刊

# わが郷土の剣豪紹介（各支部より）

## 〈鳴門支部〉

### 徳島県剣道連盟審議員　山田富康（教士七段）

鳴門支部　佐藤　勇

鳴門市の戦後の先生方は初代会長の尾形郷一先生を初め、河野先生、吉田先生と故人になられたが立派な先生方が沢山おられてその伝統を受け継ぎ、現会長の堀江幸夫範士先生初め審議員の山田富康先生、寺西慶裕先生等の先生方が鳴門の剣道の地盤を築いて来られました。この度は審議員の山田富康先生を御紹介致します。

山田富康先生は大正六年一月二十四日生まれ、本籍地（現住所）鳴門市撫養町南浜字東浜三七〇、石本籍地において山田カメラ店を経営。また、㈱コニカラー四国取締役として活躍中であります。

剣道に関する略歴を申しますと、昭和三年小学生の頃、尾形郷一先生に手ほどきを受ける。昭和四年撫養中学校入学。同二年生剣道部入部。山下治郎、福知改一、山田武雄の各先生方に師事す。昭和十七年立命館大法学部卒業。卒業後川崎重工業本社入社。同年応召。渡満軍務に服す。昭和二十年十二月主計少尉（陸軍）で復員。その間軍隊でも剣道は継続していました。

昭和二十年六月鳴門剣道倶楽部結成堀江幸夫先生に指導を受ける。この時期環境整わず第一中学の体育館、鳴門署の警察道場など転々と稽古場所を借り都合のつかぬときは野外で子供達を教える等、思い出多き苦難の時期でありました。

降って昭和二十九年十月五日五段に昇段。同三十四年十二月七日錬士取得。同四十年十一月二十二日教士取得。同四十六年五月八日七段に昇段と一貫して剣道修錬に励まれました。また献身的に後輩の指導に専念され、その後徳島県剣道連盟鳴門支部長、鳴門市剣道協会長等歴任され市剣道発展に多大な御尽力をされました。

現在は県剣道連盟審議員、県高齢剣友会副会長として重責を担われ活躍されております。また地元少年教室の主任教授として六〇名余の子供達の指導に熱心に対処され、父兄はもとより子供達にも喜ばれ慕われております。

次世代に対する期待を抱きつつ山田富康先生は自ら立派な業績を残しながら自分自身の人間形成の道に精進されております。この事を顧みる時、後継者たる我々も先輩先生方の名を汚さぬ様改めて修業に専念すべきであると決意を新たにしています。山田富康先生の益々の御健勝と御多幸を祈りつつ御紹介を終わります。

## 〈丹生谷支部〉

### 山脇隆志（剣道教士六段・竹友館長）

丹生谷支部　吉田　祖

先生は大正十三年一月十九日生まれ、本年七十歳、昭和九年海川小学校五年生で初めて竹刀を握り尋常科高等科を通じて熱心に練習に励み、常にレギュラー選手として郡大会（当時海部郡）等に出場、小規模校ながら比較的上位に進出することが多かった。特に高等科出場の郡大会でチーム中個人としては無敗で通し、団体戦に貢献大なりとして学校長より特別賞を受けた。その頃既に日支事変が始まり戦時色が濃くなりはじめ逆に剣道は下火となり練習の機会はだんだん少なくなり、たまたま昭和十七年に行われた三木頭村戦意高揚青年武道大会に出場個人優勝（会場・木頭村和無田小学校、審判長・故大澤善二郎先生）大いに面目を施した。

その後、戦争一色で剣道は全くの下降線を辿り昭和二十年遂に敗戦の日を迎える。昭和二十一年学徒動員、応召を経て復員。徳島青年師範学校に復学後、同好相はかり自主的に剣道部を創設し余暇を見つけて剣道を再開、その頃の中心メンバーが現在活躍中の高下正義、株木芳夫の両先生であったとのことである。

昭和二十二年三月同校を卒業し新制中学校に赴任するも、その頃はたまたま剣道の空白期間であり、直接の上司であった中川虎雄校長、小学校長の岡川公明先生から剣道の指導を受けることを得なかったことは、いま顧みて最も残念な数年であったと述懐されている。昭和二十八年中学校教員を退職して海川郵便局長に転じて暫くして、幼少時よりの竹友に呼びかけて同好クラブを結成して大いに剣道を楽しむ。その頃より隣村大和錬心館長大沢善二郎先生の指導を仰ぐ機会を得、これが三十代剣士の出発点となる。昭和三十二年頃地元中学校の剣道指導を手伝うこととなり、三十四年四月前記剣友に請われて自宅に剣道場「竹友館」を建設、大沢善二郎先生を初め遠く尾形郷、山家寺藤、山本忠藏、大沢孝彰（当時は青年剣士）の諸先生のご来館を得て落成式を挙げ晴れて剣道初段の館長が出現する。爾来剣友門弟約二十名猛烈に稽古に励み、更に幸いなことに中学校長清原栄先生を竹友館専任講師として年間約二百日の練習を積み門弟からも有段者輩出、館長自身も一回のロスもなく三十八年五段、四十一年錬上の称号を得られる。四十三年から五十五年までの十二年間は町長職に忙殺され全く剣道から遠去かっていたが勇退後再び竹刀を持ち京都、徳島、東京と審査に臨み昭和五十七年六段を取得高段者名簿に列せらる。その後支部役員、丹生谷支部長等を歴任されるも昭和五十八年脳梗塞に倒れ療養一年余、幸い後遺症もなく徐々に稽古を再開され七段試験にも三回挑戦されるも、常に病気への危惧と制約がつきまとい徹底的練成に至らず練度不足で不合格が続き命あっての何とやらで遂にこれを断念され、激しい稽古から遠ざかり現在は少年剣道の振興に関与する程度に留っておられることは甚だ残念なことである。

因みに氏が六段合格を記念して贈られた優勝カップ（中小各一基）は山脇杯として今年で第十回大会を数え、町内中小学校剣道のレベルアップに大いに貢献していることを申添え紹介を終わります。

## 〈海部支部〉
## 張野久晴先生

（居合道教士七段・剣道教士六段）

海部支部長　森本好美

張野久晴先生は、大正十三年七月二十一日日和佐町山河内の旧家張野家の長男として出生、地元の小学校を優秀な成績で卒業担任の先生の強い推薦でクラスでただ一人旧制海部中学校に進学された。ここで良き師浅井真一先生にめぐり会い剣道の手ほどきを受けた。その結果豊かな天分を発揮され、めきめき上達、中学卒業時には一段を免許された。

卒業後多くの友は上級学校や士官学校、師範学校などへ進学していった。人一倍向学心の強かった先生は上級学校を目指していたが、父の家業を継いでほしいとのたっての願い、悩みになやんだが孝養心の厚い先生は家業を継ぐことにした。級友の中でただ一人というくやしさをバネにして青雲の志は少しも衰えず、独学で講義録で学び、また、一人で竹刀や木刀を振り剣道や居合（中学五年の時、浅井先生より特に居合を教わる）にも熱中し文武両道をめざして励み、今日の先生の基礎を築かれた。

昭和十九年現役兵として徳島第四十三連隊に入隊、北支で日夜厳しい初年兵教育を受け、終了後甲種幹部候補生に合格した。当時の成績は剣道一〇〇点、軍事教練は九〇点と連隊二位であった。青年将校を夢見てひたすら軍務に励んでいたが、昭和二十年終戦となり夢破れて二十二年復員して再び家業を継いだ。清廉潔白にして頼りがいのある先生は部落の人に推挙され村会議員、農業委員、村監査委員、町会議員（合併後）などの要職につき町発展に大きく貢献された。

剣道が禁止されていた当時も一人で竹刀や木刀を振り、来るべき日に備えていた。剣道解禁になるや郡内の同志若松修作、平岡竹雄、西山勝喜各先生に教えを乞い乏しい防具や練習場で不自由をしのび苦労しながらも心は希望に燃えて日々猛稽古に励んだ。昭和三十五年五段を受け更に稽古は熱を帯びた。昭和四十八年教士、同六十一年には念願の六段を受領した。その時に打っ

た豪快にして端正な面は審査員の心を打ったであろう。

一方居合道に更なる情熱を注ぎ、その天稟と努力で腕を磨き昭和二十四年五段、四十八年に六段となった。後輩の指導にも力を入れ同好会を結成して中山啓男、張間義久、東根武、福井勝各氏らの高段者を育てた。居合道の奥の深さを知り己の足りなさを痛感し当時高知市在住教士八段沢田友信先生を訪ね教えを乞い門下生となり遠路はるばると高知市まで稽古に赴いた。昭和五十五年七段に昇段県下で数少ない一人となった。燃えるような情熱と努力が見事に実を結んだ。現在県居合道審査員、同監査委員の要職に就任されている。「剣先に心を、物打ちに力を」を目標に毎朝七時から八時まで自宅道場での稽古を欠かさず、また、後輩育成も小、中、高校生、一般の門人達を常時指導されている。剣道も日和佐剣道スポーツ少年団の中心指導者として専念され鍛錬の日々を送られている。

今後益々お元気にて一層の御活躍をお祈りする。

## 〈阿波支部〉

## 塩田善治　錬士六段

（阿波郡阿波町下喜来字南三二　昭和二十二年九月十五日生）

阿波支部長　坂本　裕一

先生は、中学校時代細川昭典七段教士に剣道を学び、三年間の絶え間ない努力の結果、県中学校のホープとして活躍、阿波中に塩田在りとの声高く、その当時から剣才を認められていた。脇町高校に進学し、故滝下勝七段教士に指導を仰ぎ、益々その技能を伸ばし県下高校の剣道界の重鎮として活躍し将来を期待された。高校卒業後国士館大学に進学し、更に修錬を積み毎年の昇段試験にも合格を重ね国士館大学剣道部の中核としてその実力は高く評価されていた。卒業後は郷里に帰り高校教員を志願して採用試験を受けその難関を突破して見事合格晴れて高校教員としてその目的を達成する。

阿波商業高校、徳島農業高校を経て現在川島高校に勤務し川島高校剣道発展向上のため全精力を傾注している。近隣中学校の剣道部の生徒達も多く先生の下に集まりその指導を仰いでいる。先生の卓越せる指導が実を結び川島高校剣道の実力向上は近年目覚ましいものがある。特に女子剣道部の活躍は素晴らしい。この川島高校の躍進と努力に対し卒業生を中心にＰＴＡ達も物心両面の援助と協力を限りなく続けていることも特筆すべきことであろう。他校に真似の出来ない大きな年中行事の一つに近県の優秀高校を川島高校に招き交流錬成大会を数年にわたり続けているのもこの学校の大きな特色であり、他に余り例を見ない行事であろう。この基礎を築きあげたのは先生の努力の結晶のたまものである。先生自身も学習指導や忙しい校務のかたわら日夜修錬を怠らず昭和五十九年に六段昇段試験に合格、更に六十一年に錬士試験に合格し称号を授与される。

現在では県学校剣道連盟の強化育成に努力を重ねると同時に七段位昇段に向い精進の毎日である。このような実績が認められ一昨年本県に於て開催された国体のリハーサル大会として全国教職員大会の事務局を引き受け、計画、立案、実施の総てにわたって敏腕を発揮し、種々の困難を克服して大成功裡に大会を終了させたのも先生の大功績の一つであり、続いての東四国国体の剣道の部の活躍と成功も先生達の力に負うところが大変多いことは論をまたないところであろう。将来本県剣道界を背負って立つに値する力量の持主であり今後益々のご活躍とご奮闘を期待するものである。

# 郷土の誇り　藤川一太郎先生

徳島県剣道連盟徳島支部長　馬　場　　力

明治三十八年二月五日生まれ、徳島県脇町庄、豪農父藤川善兵衛、母ヤスとの間に、長男京太郎、長女ハル、末子一太郎として生を受ける。

幼少より同町の士族の流れをくむ某氏に剣道の指導を受けること数年。体格素質に恵まれ技倆は急速に進歩した。地元旧制脇町中学校に入学と同時に当時脇町拝原に住居を置く同中学校剣道師範井口喜助先生に見込まれ、当時正課であった剣道を本格的に指導を受けた。

中学校卒業後は京都にある大日本武徳会武道専門学校に入学。武専独特の超人的な荒稽古に耐え、しかも最優秀生として卒業した。卒業後、大阪府立高津中学校教諭に採用される、時に剣道四段。昭和三年十二月松山歩兵二二連隊に見習士官として入隊。昭和四年満期除隊後、そく元職復帰。当時近隣の脇町中拝原で手広く藍商人として活躍しておられた佐藤家の息女と結婚。昭和四年二月大日本武徳会大阪支部剣道助教授、陸軍少尉。同年四月叙正八位を頂く。同年五月剣道精錬証拝受。

昭和四年七月徳島県知事に就任した土居通次県知事の要請により徳島師範学校の教諭となり徳島市新蔵町に居を構えられた。同年九月年齢二十六歳にして剣道五段へ昇段、徳島県巡査教習所剣道教師として指導にあたる。昭和十三年七月剣道教士。

昭和十三年九月臨時召集令にて四三連隊に入隊、同年十月に陸軍中尉、叙従七位、同十四年十月に梨岡部隊中隊長として中支に出征し殊勲により同十五年四月功五級金鵄勲章並びに勲五等双光旭日章及び金三千円を受章、剣道六段昇段試験に合格。同十七年五月皇居済寧館における天覧全国選抜剣道大会に出場優勝恩賜の刀を拝領する。同十九年五月任叙高等官七等、徳島師範学校助教授、生徒主事補、同年六月召集にて西部第三二部隊入隊、同年六月鹿児島県大島郡徳之島亀津町の沖合約二浬の海上で激戦壮烈なる戦死を遂げた。

陸軍大尉　勲四等功四級　剣道七段教士

君のため何か惜しまん若桜

散って甲斐ある命なりせば

エピソードとしては

皇居済寧館で行われた、全国選抜剣道大会出場前に、竹刀の先端にゴム製棒状の物を突っ込んでいたのを見て、武専後輩の徳島市新内町にて接骨院開業青山芳幸氏が「そんな先の重い調子の悪い竹刀で」と言うと、「晴れの大試合では緊張しがちで、先の軽い竹刀を使うと、剣先がピリピリと動いて恥ずかしいんでね」、その恥ずかしいと言う表現は、二十歳代の藤川一太郎先生が、若くてもすでに達人の境地にたっしており、小生としては自分の未熟さを棚に上げて本当に心憎い限りであります。

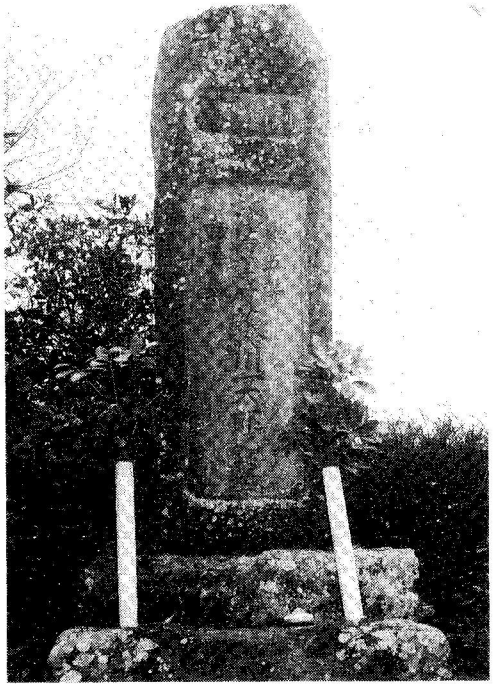
藤川先生常用の竹刀は二百匁（七五〇g）の竹刀を愛用（普通一般の竹刀で、五〇〇g～五五〇g）が常識であります。天覧試合に使われた竹刀は、百三十匁（八〇〇g）あったといわれています。

徳島師範学校在職中、生徒諸君に対する指導方法は武専仕込みの指導法で打ち込み、切り返しで癖を消す、朝から素振り五〇〇本、終わると同時に即一〇〇本追加の号令が飛びそれが毎日の稽古で行われ、友人同士の喧嘩や悪戯の罰則も素振り一徹であった。藤川教官といわずニックネームは「素振りさん」との愛称で生徒諸君より機知、精悍、迫力に富んだ指導者と大変信頼を受けていたようです。徳島師範学校剣道部OBの先生方は藤川一太郎先生の剣道精神を受け継がれ渭水剣友会を結成、徳島剣道発展に寄与せられている姿を見ますと、頭が下がる思いがいたします。今後ますますの活躍を祈念いたします。

武道専門学校の方針は大器晩成を信条とし、その教育をうけながら戦争という不孝であまたの素晴らしい人材をなくしたことは、県剣道界は言うにおよばず国家の大きな損失ではと痛感する次第です。

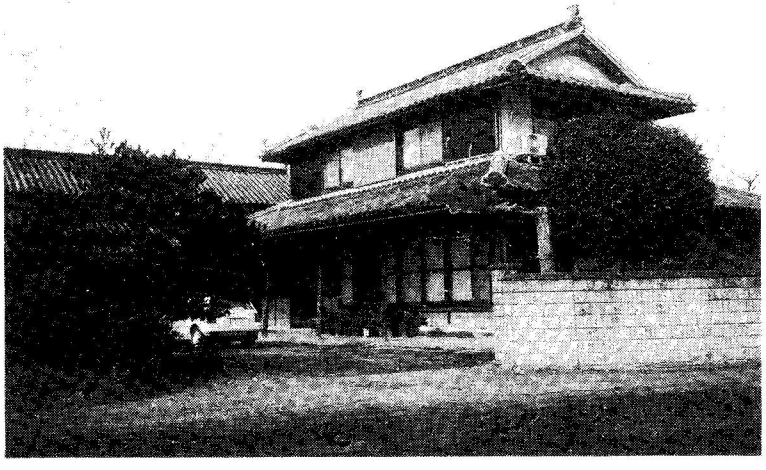
最後になりましたが、藤川一太郎先生ご夫婦の間には、二男一女に恵まれ、長男藤川一俊氏は東京に本社のある佐伯建設副社長の要職につかれ、本宅は大分に構えておられるそうです。二男義雄氏は大分市内において自営業を、長女ひろ子氏は自衛隊の幹部梅津氏と結婚、徳島市に在住せられ、ご兄弟妹そろって前に申し上げました通り活躍せられております。

藤川先生の偉業につきまして方分の一もお伝えすることができておりませんが、賢明な剣連会員皆様のご賢察をお願い致します。



藤川一太郎先生

青年時代



実　　家

# 庚午事変（道楽話として）

徳島県剣道連盟監事　阿波支部　笠　井　　選

時折には暇を持て余すとはいえ、外へ注文取りに出るわけにもいかなければ、じっと座って好きな書画骨董を眺めたり、また面白い歴史書やチャンバラ小説を読んで楽しんでいる。人からは道楽者と評されているが、この原稿もその産物の道楽話であり、もしお読みになっても何の益も、また害もなく、もとより剣道が上達することは絶対にないということだけは断言出来る。

事は明治維新に伴い阿波で起こった騒動で、本藩というべき蜂須賀家の徳島藩と分（支）藩的な稲田家（藩）の家臣間の争いであり、明治三年の庚（かのえ）午（うま）の年の事なので世に庚午事変、または稲田騒動とも名付けられている。

維新直後の明治初年に各地で起こった不平士族の動乱とは違い、原因は複雑であってこれを理解するには蜂須賀・稲田両家の成立と、その歴史的関係及び稲田家（藩）の特異性を知る必要があろう。

## (一)　蜂須賀藩稲田家の成立とその関係

約四百年さかのぼった戦国時代であるが、当時の木下藤吉郎と蜂須賀小六正勝とのことは虚実織り交ぜて有名で周知のことであるが、この頃小六を扶け君臣の関係ではなくて兄弟分的な不確かな身分で、墨俣の築城及び永禄十年（一五六六年）の斎藤竜興の稲葉山城攻略に協力して活躍したのが、稲田家の祖「大炊助貞祐」であったが、これは史実であり読んだ人も多いと思うが、津本陽が「下天は夢か」の題名でくわしく小説化している。後日、豊臣秀吉により蜂須賀が播州竜野六万石の領主となると共に稲田には河内二万石、次いで天正十三年（一五八五年）に蜂須賀（家政）に阿波十八万石が与えられた折に、稲田は出石（兵庫県）城主となるべきであったのを断り蜂須賀と行を共にして、天正十三年（一五八五年）に譜代の臣五百名（四百名との記録もある）と共に脇城に入った。次いで大阪冬夏の両陣の功によって徳川秀忠より慶長二十年七月（と郷土史には書かれているが、慶長は十九年までで、次年は一月より元和とあり、また別の年表では七月以降を元和としている。大阪夏の陣は元和元年五月とある）蜂須賀に淡路六万石が加増されると共に、稲田は一万四千五百石の附家老として脇城から洲本城代として淡路に移っている。

当時は縦の社会とはいえ、後日の様に君臣の義は確立しておらず、まして友情というべき横の関係の薄い時代でありながら独立した大名となるのを二度も拒否して、家老とはいえ臣従する地位をなぜ選んだのかは不思議に思えるが、私はいまだ戦国の余韻の多い時でもあり何等かの黙契のもとに戦力の分散を防いだのではないかとの推理も可能と思う。

余談になるが附家老とは、藩主が登用任命したものではなく、幕府が補助監視の目的で命じたもので尾張徳川藩の成瀬家（犬山城主）、紀州徳川藩の安藤家（田辺城主）と共に稲田は三大附家老の一人といわれていた。

## (二)　稲田家（藩）の特殊性

### (イ)　家臣の数の多いこと

前述の様に、天正十三年に尾張から五百名の家臣と脇城に入ったが、小農自立を認めて在地の土豪住民との妥協融和をはかり、浪人地侍を家臣に加えた所謂屯田兵である。領地は現在の美馬麻植阿波郡と板野名西郡の一部であり、その数は猪井達雄著「稲田家御家中筋目書」（徳島中央図書館刊）によると、三好郡二七、勝浦郡二七、美馬郡一七七六、阿波郡六七、徳島一一、州本三三二、麻植郡三二〇、名西郡二二、板野郡三七、所不明四〇八計三〇二七名と多く優に十万石の大名並みの家臣の数である（平時体制では一万石につき二百名位が標準であったらしい）。但し、ほとんどが土地持ちの地侍で三石～五石の微禄で百姓同然だったと思える（一石は百四十キログラムで現在価格にすると五～六万円か）。

### (ロ)　財政の豊かなこと

大名の財政的疲弊の最大の原因は参勤交代であり、他の家老は自己の家臣を伴って藩主に従う義務があったが、稲田家は洲本城代としての役もあってこれを免除されていた。

また御用金調達の自由も認められて余剰金を大阪に送り商人に委託して利殖をはかり、また領地は藍の産地でもあり実収は三万石以上といわれている。

(イ) 他の特権

江戸時代は宗教上の問題として藩主による宗門改めの制があったが、稲田家はこれを自身で行うことが出来た　また参勤交代は免ぜられていたが、将軍は代替りの儀式の服装係を務め、江戸城内では　詰の間　「控室」が与えられ独立大名の待遇であり、阿波は既に二重構造的であった様である。

(二) 稲田藩の勤王運動

明治維新に際しては、各藩共に勤王あるいは佐幕、または中立と、それぞれ立場を異にしたが、徳島藩は藩主茂昭公が徳川家の出であり、殊に将軍慶喜公とは　おじおい　の間柄であったため心情的には佐幕であったであろう。この点稲田は豊かな財力もあり自由な立場で早くより勤王運動に活躍し、殊に元治元年（一八六四年）の禁門の変では、稲田藩と公称して奮戦し他藩の称賛を得たが、この時の藩名を公示したことに対しては、本藩から異議があったとの記録はない様である。当時はいずれとも勝敗の判断を決めるのは困難であったので、両藩の上層部の間で、関々原役での真田家の故事的な行動をとったか？との想像はいささかうがち過ぎであろうか。

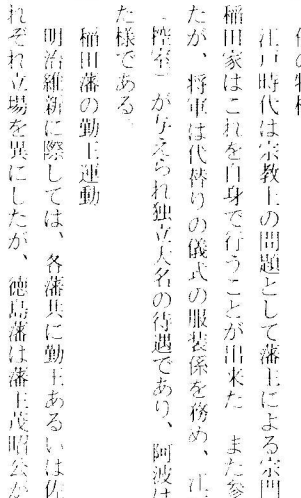
(ホ) 両家臣間の対立

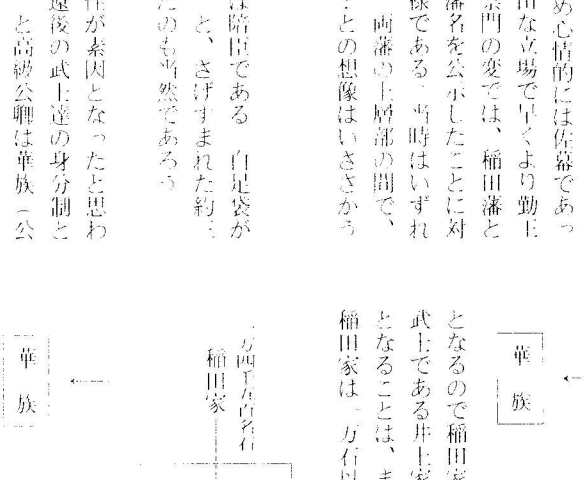
ともあれ、稲田の家臣は本藩徳島側からみれば陪臣である　白足袋がはけず黄色の足袋の為「浅黄者」とか「また者」と、さげすまれた約二百年間の鬱屈があり反発心に燃えて武力を練ったのも当然であろう。

(ヘ) 原　因

以上の両藩の関係と、稲田家とその家臣の特殊性が素因となったと思われるが、維新による明治二年六月十六日の版籍奉還後の武士達の身分制と待遇が直接の因となった　即ち大名（一万石以上）と高級公卿は華族（公侯伯子男の五階級）に、徳川家の旗本と各大名の直臣は士族に、それらの陪臣は卒族と定められ、これに従っての経済的処遇の変革も行われた

今これを分かりやすく表示してみると




となるので稲田家臣一般の武士はもとより、殊に家老で五百石取りの高級武士である井上家等にとっては士族にもなり得ず、他藩の足軽並みの卒族となることは、また心情的に堪えられなかったのは当然であっただろう。稲田家は一万石以上であるので蜂須賀より分離すれば、

となり得るので維新の際の勤王運動の功と実績を掲げて、明治二年二月十一日より新政府に向かい分藩独立運動を始めた　これに対して徳島藩士は主君蜂須賀への反逆行為として弾圧したのが直接の原因であり、また事変そのもので、いわば稲田側の現実論と蜂須賀側の感情論の対立であったと

いえる。

(四) 事　変

両者共中央政府への陳情等で曲折を経たが、進展のないままに明治三年五月十三日（旧暦）朝、徳島藩士と淡路農兵隊八百名が州本の稲田家の本拠を攻撃し、自殺者二名、即死十五名、深手（重症）六名、浅手（軽症）十四名と多数の家屋を焼打ちした。他の別動隊（鉄砲隊）百六十名が脇町（猪尻）攻撃に向かったが、名西郡下浦願成寺に於て徳島藩士牛田九郎と卜條勘兵衛の両者が自ら腹を切って阻止し得たが、切腹してまで藩命を遂行した行為は誠に武士らしい立派なものであったが、考えれば同僚に殺されたも同然であり気の毒な運命といえる。

他方猪尻の稲田側では迎撃論もあったようで兵力は二倍以上もあり、当時の戦闘力としては余程優勢であったが、拝村吉左ヱ門の指示によって無抵抗で、全員高松藩領仏生山に退避したのは適切な処置であり徳島藩の指導者であり、後日切腹せしめられた新居水竹が卜部の暴動を止め得ずして、むしろこれに加担したかとの行動であったのとは対照的な行為であったとの批判もある。

また余談に入るが高松藩領仏生山に避難した稲田藩士に対しての待遇は非常に丁重なもので、食事は特によくて晩酌まで出たとのことが、我が家でも曾祖父から言い伝えられている。これは維新の戦の折、稲田藩士が有栖川宮の東征軍に従い、徳川の親藩である高松藩の攻略に際して非常に好意的に穏順に接したことに対しての同藩の君臣共々からの返礼であったとのことで帰還に心残りする者さえあった。

五月二十七日に高松藩より公文書で以て四十一名が帰された。これらの方々の氏名は当時の文書で明らかであり、四～五代の子孫の人々が脇町を中心として（姓より見て）現存されている方も多いであろう。

六月二十一日になり他の三百名の避難した家臣達も全員帰還し、一カ月余の騒動も終わった。

(五) 事変の処分

旧幕時代からの慣習によれば事件の処分は総て両成敗であったらしい（但し浅野吉良の事件は別として）。徳島藩側に対しては、新居水竹以下斬罪（後切腹）一〇名、終身流刑二六名、終身禁固八名、三年禁固二一名、二年半禁固五名の処分が八月に太政官より出された。

稲田藩側には北海道開拓の為の移住が命ぜられて、明治四年一月から六月の間に目高静内郡に一四八戸五〇五〇人が渡航した。八月に出発した一四人は紀州灘で遭難して八三人が死亡した。無事渡航した人達も厳寒の北海道の開拓には非常な辛酸をなめたであろうし、またこの史実も作家船山馨氏の作品の「お登勢」という題名の小説で有名であり、またテレビ映画化されている（昭和四六～七年頃で四八年頃テレビ放映された筈）。

また行政的には阿波藩領であった淡路島が兵庫県に属することになった。版籍奉還で藩は消滅したものの稲田家は最下位ではあるが華族（男爵）となり、家臣は総て「士族」を称することが出来て分藩同様となり空手形とはいえ一応の目的は達せられた。

(六) むすびとして

郷土史家で有名な金沢治氏は著書の中で、庚午事変を称して「井底の蛙の生きんがための号泣」と書いている。江戸と阿波の間、往路だけで七～八日を要した時代であれば確かに井の中の蛙であったであろう。しかし当時の藩士は直接自分に禄をくれる人のみが主君であったし、儒学とか朱子学で三百年近く培われた「君臣の義」にのみ固執し、かたくなで意地を張る、所謂「さむらい気質」と、一般的に武士は藩という枠外へは出ない「出られない」という思考と行動的な習性であったことを理解せずして、これを痴と形容したのは現代だからの解釈であり、私は当を得たものではないと思い先覚の大学者に対して失礼ではあるが、我々の祖先の心情を思い憤りを感じることを素直に述べておく。

そして本件とは意味も内容も違ったものではあるが、明治四年江藤新平の佐賀の乱、九年の前原一誠の萩の乱、一〇年（一八七七年）の薩摩の西南の役で、明治維新に伴う不平士族の騒乱で「サムライ」の時代は終わり大急ぎながら明治という近代に移行した。

司馬遼太郎の言を借りれば、「明治維新は平等の思想の下に近代国家を作るという唯一の命題の下に「サムライ」によって行われた世界でも珍しい革命であったが、この唯一の命題は社会のあらゆる層に犠牲を強いて、

しかも何の層からも喜ばれず、すべての層がはげしい手傷を受けた。しかも革命政権を自分で作り、自分の武力で護った武士達は、新政権によって自分達の身分的また経済的特権を剝ぎ取られた」と。（司馬遼太郎著「十六の話」）

後日特に維新の中心的であった薩長両藩の下級藩士の中から、明治の顕官といわれた「伊藤博文、井上馨、山縣有明、大久保利道等」にぎりの者は、各大名と共に華族となり身分的経済的特権を長く昭和初期の子孫まで享受した。思えば元禄時代以来、特別なことのない限り、代々同じ役で変わらぬ禄を受けて、全く官僚化サラリーマン化した武士達が最後にサムライ本来の姿に返り武士らしく活躍したのが幕末明治維新と思えるが、その自らの行動の結果が自らを滅ぼして、何の利権もともなわない「士族」という族称のみを与えられて路頭に迷うことになった。

けだし総て、今では昔のことである。

（註）この原稿は、脇町稲田会の会報誌用として書いたが、左記のものより引用転用及び参考としたことをお断りします。

一　庚午事変　庚午事変編集委員会金沢治他
二　庚午事変研究の栞　一宮松二他
三　稲田騒動概説　平瀬金造他
四　庚午志士の面影　平瀬金造著
五　稲田家御家中筋目書　猪井達雄著
六　稲田騒動　徳島新聞夕刊（昭和三四年六月五日～六月二七日）
七　庚午事変稲田騒動六〇年前の夢　明治新政の犠牲（著者不詳）

# 阿波における関口流剣術の伝承と武田神全塾について

坂本裕一

関口流は流祖、関口六右衛門氏心（一五九八―一六七〇）によって創始された流儀である。氏心は隠居後「柔心」と号した。

氏心の祖父関口刑部少輔氏広は今川義元の妹智で、岡崎松平信康の外祖父にあたる。長じて刀槍の法を良くし、さらに良師を求めて修行し、やがて組打ちの諸術を根幹として柔の一流を開き「柔新心法」と名づけた。氏心は菅沼松平飛驒守忠隆に召し出されたが、その後転々とした末、紀州藩主徳川頼宣に招かれ、和歌山に在住した。この地で氏業、氏英、氏暁の三子をはじめ、多くの門人を養成し、流儀の基礎を作った。紀州藩で発展した関口流は全国各地、江戸、肥後、尾張、彦根等広範囲に伝えられた。

阿波に於ては紀州と地理的に近距離にあるので早くから関口流が伝承された。延宝年間（一六七〇頃）阿波藩士二百五十石広瀬権太夫直澄は氏心の子氏業に関口流剣術を習い阿波藩で関口流の師範となり、藩士に伝授し、広瀬家は幕末まで関口流剣術の師家であった。享保の頃（一七二〇頃）八十石阿波藩士若山鉄雲吕重は広瀬より関口流剣術を学び、以後若山登龍直吕（資料二）、春斉吕番と三代、関口流剣術を修め、徳島城下の関口流剣術の師家は広瀬家と若山家であった。たまたま十一代藩主重喜（一七三七―一八〇一）の時呪詛事件（宝暦十二年四月）があり、吕番はこの事件に連座して追放処分を受け浪人となった。明和の頃（一七六四の頃）吕番は脇町に来て、稲田家臣に関口流剣術を教えた。この時伝授を受けたのが武田尺龍雄隆旨助（資料一・二）であった。吕番の弟信精は阿波藩士一條家の養子となり、同家の四代目を継ぎ、一條家は代々城下で関口流剣術の師家となり城下で教えた。若山家は、その後脇町より阿波郡香美村（資料八）、上成村水田に移り、関口流剣術を教えた。阿波の関口流は広瀬の流系から派生したものである。

## 武田家と関口流について

武田家の初祖は六車宗丹である。出身は讃岐であるが美馬郡猪尻村に住ん

ていた　蜂須賀氏が阿波に入国して稲田家が脇城の城番となると稲田家に有事、第六代宅之助の時、六車を武田に改姓した　武田家からは頃から武術を家業とするようになったか明らかでないが武田家第六代音助からであろうかと考えられる　旨助は兵能（寛政元　一七八九）年頃　関口流剣術、柔術、居合術は日置流、雪荷流、軍法は橋本流など各種武術、軍学を学び自宅に稽古場を設けて門弟等を教授した　嫡子宗作は脇町能（資料六）　享年六十　天保五年　に剛に力が絶倫、音文和歌、詩句など学問にも優れ、日夜に私塾を開き学問と武術の両方を教授した　この私塾を神全塾（資料一）と称した　次の大軸は龍淵（寛政六年　天保六年　（資料七）も武術、学問に優れ、父親宗作とともに門弟に教授した　父親宗作が死去すると間もなく大軸も早世した　その子禎太郎は龍吉　文政二年　明治十年　早くから父がよく家芸を守って神全塾を維持した

武田家関口流の特徴

関口流の特徴は柔術、剣術、居合の三つを根幹とした実戦的総合武術の性格を具備したものであったが、精神的要素即ち理念を伴わせず実際に必要な技を最大限に細分化して物理的解明を念願とした　武田家で教えた関口流の柔、剣、居合にも多様な技法が伝承されており、その技も我流になることを恐れ、機会ある毎に紀州宗家関口に訪問修行して技の研修を行い、伝統を重んじ、正統の業の伝承に力を注いだ

さらに大きな特徴は伝統を重んずると共に実戦的武術にするため、試合を極めて重視したことである　このことは私塾神全塾塾則（資料四）にも書かれている　この時代にほとんど他流試合は行われておらないが、武田家は毎々他流試合を行っており、塾舎の南（資料五）の吉野川の河原で盛んに野稽古（野試合）を行った

このように画期的武術が何故行われるようになったか次の事項によると考えられる

一、脇町は交通の要所であり、立地条件が具備しておった　即ち　撫養街道の徳島と池田との中間であり、清水越えの讃岐街道の接点に当たり、当時町の南側は吉野川が流れ、水陸の便が良い、したがって人事往来が劇しく全国の情報が入り易く、阿波特産物の藍の一大集散地で商工業の中心地で経済的に恵まれていた

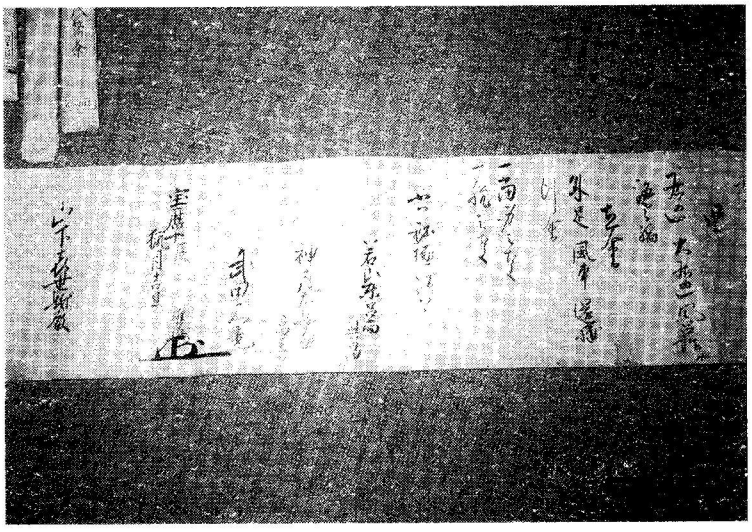
二、稲田家は脇町猪尻に会所（役所）をおき役人が事務を執るだけで本拠は淡路の洲本であった　故に脇町周辺の稲田家臣団は統制が緩やかであったため、自由に行動かとれ、武者修行者なども受け入れ易かった

三、徳島藩は地方知行制が幕末まで存続して給地は軍役、給人を確保するための基盤であった　そのため給地における百姓はいつも軍役に服す準備が必要であったので武芸を修得した

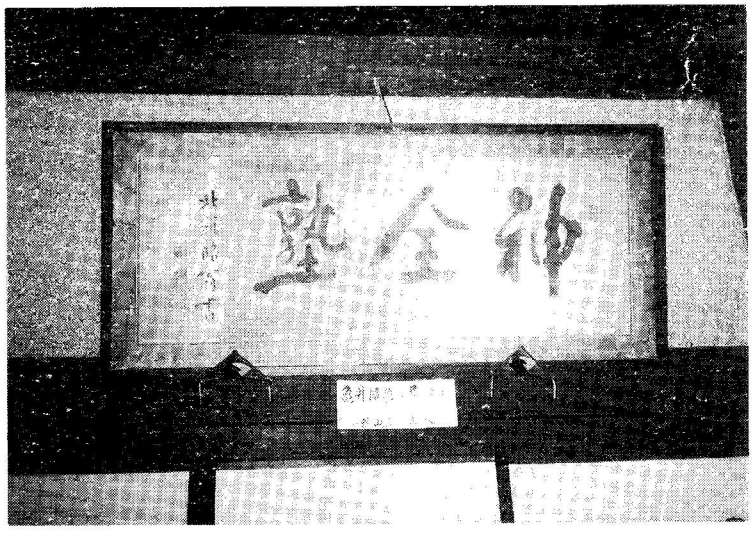
四、稲田家は徳島藩蜂須賀家の一家臣であったが知行高は一万二百五十七石、美馬郡周辺だけでも譜代家来六百五十三名、春会人二千百十九名と天保二年（一八三一）年の家来名簿帳に書かれており、小大名に匹敵する大家老であったが家臣は本藩蜂須賀家直接の家来でなく陪臣であった　故に本藩の家臣からは　又家来、戊葱者　と軽侮されていた　この屈辱を晴らすため、学問や武芸に精進した

とにかく稲田家臣達は貫心流、丹石流、心形刀流等の流派の剣術も行ったが関口流が特に盛んに行われたのは関口流の理念が他の流派より稲田家臣団に適合し、武田家が代々関口流を伝承し、指導の努力によって吉野川中流脇町の神全塾を拠点としてその尽力の「花」が開いたものと思われる

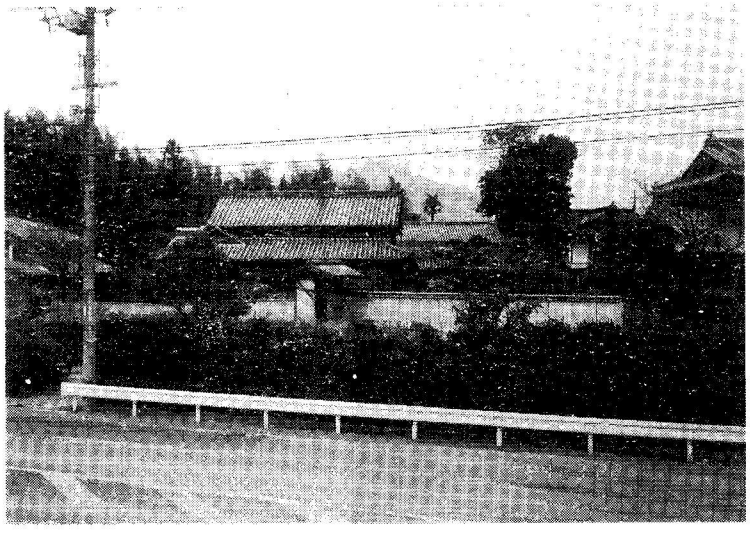
資料一
門弟が建てた武田尺龍先生の墓
脇町東林寺境内



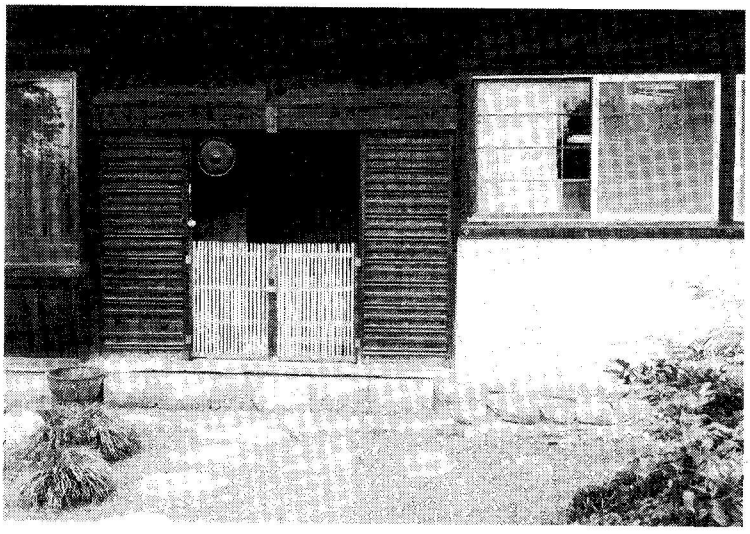
資料二
武田尺竜が山下に与えた允許状



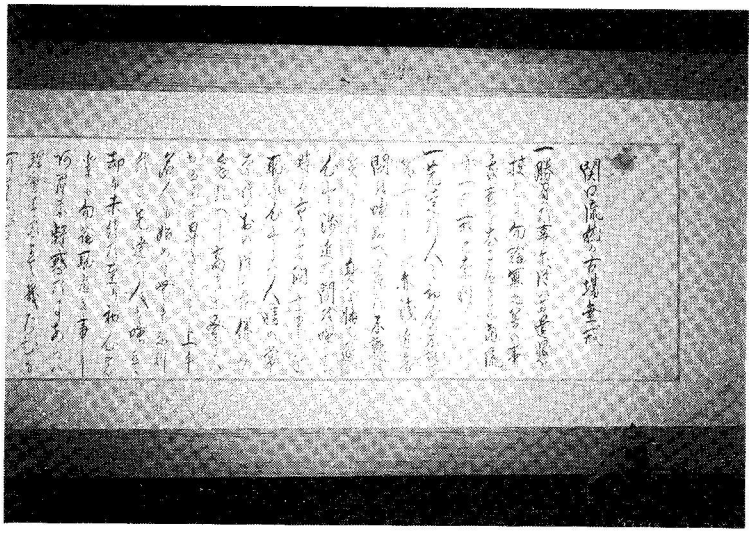

資料三
神全塾扁額　頼山陽の友人亀井昭陽揮毫



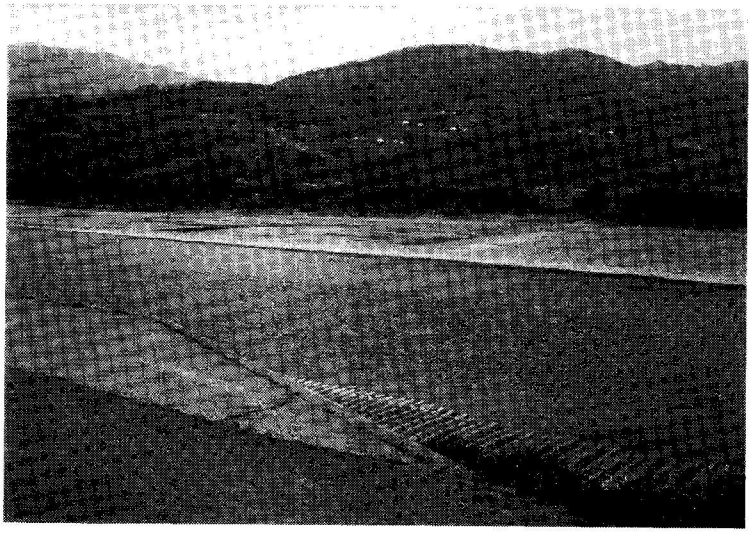
資料三
神全塾の全景　美馬郡脇町大字猪尻字西分一〇八
当主　武田誠夫



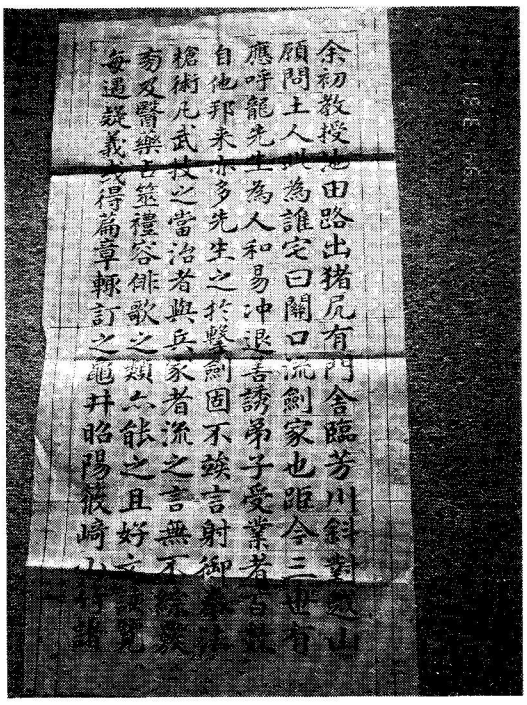
資料三
神全塾の玄関



資料四
神全塾の塾側

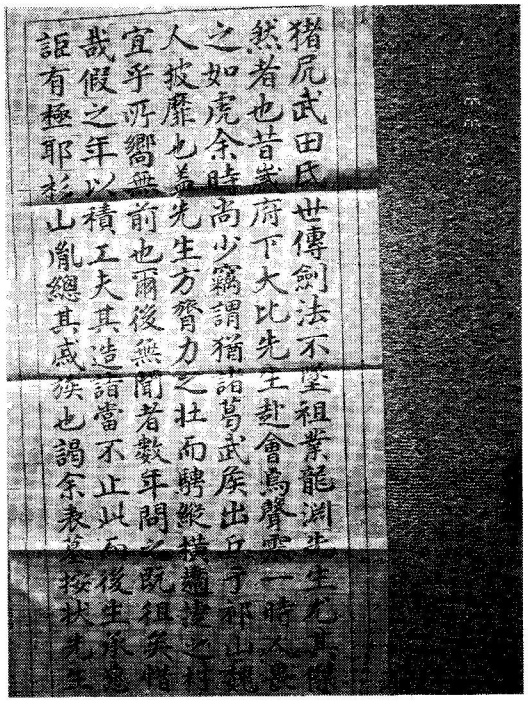


資料五
神全塾の南側が吉野川野試合を行った吉野川の河原



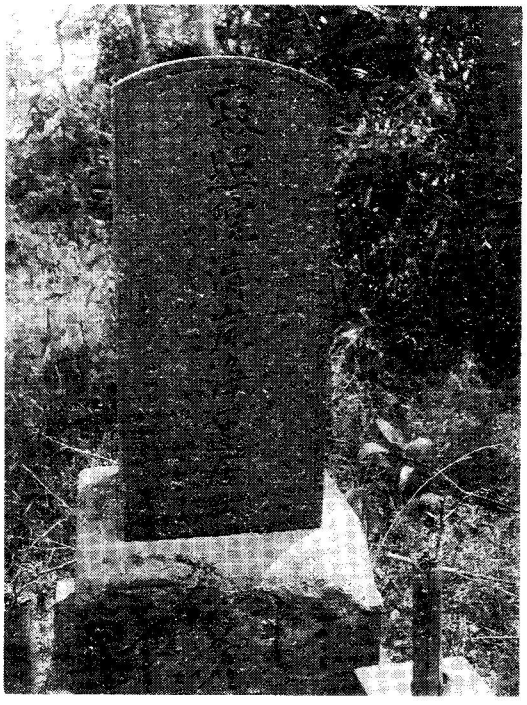
資　料　六
應呼龍先生の墓碑　新居水竹の撰並口書

資　料　六
應呼龍武田先生之墓　文武門弟中
場所　脇町大字上野八幡神社西参道の石段南側

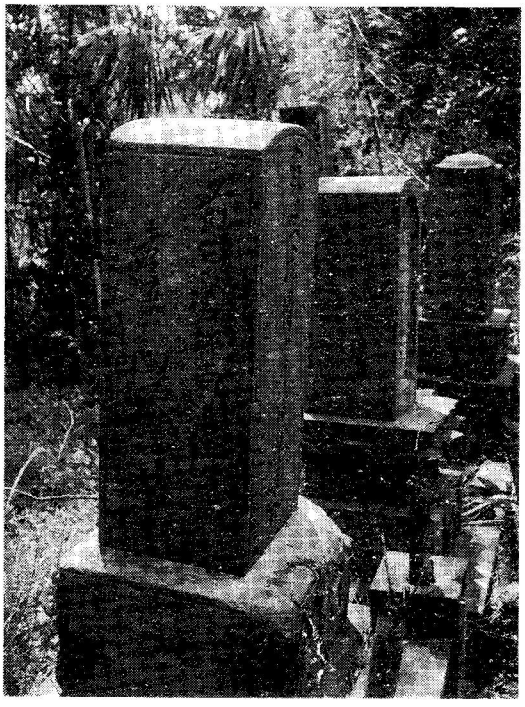


資　料　七
龍淵先生の碑文　新居水竹の撰並口書

資　料　七
龍淵武田先生の墓　場所　脇町東林寺境内



資　料　八
門弟の建てた若山尚活先生の墓
場所　阿波郡市場町大字香美字渡りの墓地



資　料　九
若山尚活先生の墓の側面　前日若山尚活梅豊

# 「剣豪紀行」堀部安兵衛武庸（ツネ）

直心館長　田村直

生涯二度の仇討ちをとげた武勇の士
吉良討入りを推進した堀部安兵衛武庸（ツネ）
武と文両道の達人といわれた躬行の侍

元禄十五年（一七〇二）十二月十四日の夕方、堀部安兵衛が本所のある〝ソバ屋〟にきて、「今夜五十人ほどが会合するから部屋を貸せ。酒や食べ物は六十人分用意せよ」といい金三両を投げ出した。と俗にいわれている。〝堀部安兵衛〟私は少年の頃、講談本をよく読んだ。なかでも心に残る痛快な物語が、忠臣蔵であり、そのなかでも討入り急進派の旗頭である堀部安兵衛の企画力、そして誠実と実行力に心がひかれたものである。

仇　討　誓　紙

「御亡君御父祖代々の御家、天下にも代えさせられがたきお命まで捨てられ、御鬱憤（ウツ）散じられ候ところ御本望遂げられず候段、御残念の至り、臣としてうち捨てがたく存じ奉り候、以下……略」

元禄十四年十月二十九日

堀部安兵衛武庸（ツネ）筆

こうした堀部安兵衛の文書にみられるように討入り急進派の鎮撫の為に由科を出た大石内蔵助の慎重論を伝える使者の原惣右衛門等の二人も、安兵衛らの吉良仇討ち論に、逆に説得されてしまうのである。第二の鎮撫役として進藤源四郎と大高源吾が上京したが、この二人も討入りの誓紙を交わすことになってゆき安兵衛らの意気軒昂たるものがあったと、伝えられている。

原惣右衛門や大高源吾は、やがて内蔵助に討入り決行を急ぐよう説得する

安兵衛の有力な力となって、その結束をいよいよ強めてゆくのである。

堀部安兵衛武庸（一六七〇―一七〇三）馬廻役（二百石）、行年三十四歳。戒名双雲輝剣信士。越後新発田の出身、旧姓中山。十九歳で江戸に出て堀内源左衛門に剣を学んだ。元禄七年（一六九四）義理の叔父菅野六郎左衛門の高田ノ馬場での果たし合い（仇討ち）を助けて一躍有名になる。

「血煙り高田ノ馬場」

浪人の中山安兵衛は、「呑んべ安」といわれるほど大の酒好き（実際は飲まない）。叔父の菅野六郎左衛門から、高田ノ馬場へ村上兄弟と果たし合いに行く、という手紙が届いたときも、どこかで飲んでいた。（講談記）

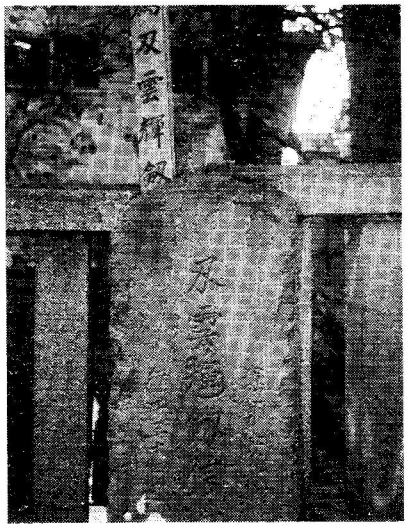
やがて帰ってきた安兵衛は手紙をみて驚き、朱鞘の愛刀を腰に帯駄天走り。相手は、村上兄弟に中津川祐見ら門弟十八人。既に菅野六郎左衛門と若党の大場一平および草履取りの三人は瀕死の状態。

怒り心頭に発した安兵衛、見物人の中から進み出た老婦人の連れた娘、幸の扱帯を、忝けないと襷にし身支度をととのえ群がる敵に斬りこんだという。

見物人は拍手喝采、安兵衛の名は江戸中に知れわたり武名が顕彰された。

ところで、かの老婦人は赤穂藩、江戸留守居役堀部弥兵衛の妻（お若五九歳）。これがきっかけで安兵衛（二六歳）は、弥兵衛の娘婿となり赤穂藩に仕えることになるのであるが。若いとき約三年間は天竜寺の長屋にあって学問、書道に精進している。

「附説」仇討ちをした赤穂浪士の生死は紙一重の差で、当時の有名な学者室鳩巣は助命説。荻生徂来が切腹説。浪士達は切腹させられるとは考えていなかったんではないか、という作家もある。とにかく浪士たちは仇討ちをした時から人気者になり四家の大名家に預けられ、みんな厚遇されている。安兵衛にかかわる商店が「東京文京区の本郷通り」に今も「かねやす」という店名で残っている。




また、品川の泉岳寺には、安兵衛が書いたという看板が伝えられている。

「却説」安兵衛の生い立ちは実父弥次右ヱ門が浪人後、早く死去したので、祖母と姉に育てられ、姉婿の長井弥五左衛門に文武の道を教えられ、元禄元年十九歳のとき江戸に出て剣客の堀内源左衛門に師事し、儒者伊予西條藩士菅野六郎左衛門と親交した。そうして元禄七年の高田ノ馬場の決闘となるのであるが、義によって助太刀したが、斬った相手は、村上三兄弟に若党の計四人が正しいようである。

安兵衛は企画力と誠実さが浅野藩で認められ、度々奉行の代理人などを務めている。仇討ちの計画はおさおさ怠りなく進められた。

元禄十五年八月十二日。江戸の同志が仲秋の観月の宴を装って、月明の隅田川に二艘の舟を浮かべた。

安兵衛と又之丞が円山会議の模様を報告、半刻の後。茶人の源吾が「さて、ご一同。これにて血判終了」と興奮の裡に伝えた。つづいて、神崎与五郎、

酒でうるおした咽喉で自作の歌を朗々と吟じはじめた。

照る月の円かなる夜にまどゐする
人の心の奥も曇らじ……と。

それからも忍苦の日を重ねて、今日十四日は、月こそちがえ亡君の命日である。内蔵助は勝栗をつまんでゆっくり食べてから、

「諸人に御酒をすゝすめて盃を。とりどりなれや梓弓。やたけ心のひとつなる。武士の交りたのみあるなかの酒宴かな」と、謡曲「羅生門」の一節をうたった。〃辛苦艱難〃いよいよ決死の「集合の刻が迫る」。

三々五々、本所林町五丁目の堀部安兵衛宅に隊士が続々と集まりきてしずかに身支度にかかる。

特に上帯には鎖を入れて締めた。これは、安兵衛が高田ノ馬場で帯を切られて困った経験からの意見によるものであった。

十五日ノ寅ノ刻（午前四時）源吾の句がある。

〃なんのその岩をもとほす桑ノ弓〃

「ソバ屋」を出た隊は二つに分かれ更に分隊から班、組と部署についた。

梓弓春ちかければ小手の上の
雪をも花のふぶきとや見む

神崎与五郎はこの歌を前原伊助に披露した後、表門に突進し豪弓を引いた。

吉良屋敷を守る武士は付人の外に浪人も七名ほど雇入れていたので抵抗防衛力は強かったので、赤穂老士も四十七名を屋内に突入させるわけにはゆかなかった。

部署は次の如くである。（池波正太郎ニ依ル）

①「屋内突入組」

○東組（表門）片岡源五右衛門、奥田孫太夫、富森助右ヱ門、武林唯七、矢田五郎左ヱ門等十名。

○西組（裏門）堀部安兵衛、磯貝十郎左ヱ門、杉野十平次、大石瀬左ヱ門等十名。

吉良側の剣豪小林平八郎と安兵衛との一騎討ちは映画などでおなじみである。一番強いといわれた小林平八郎に勝った安兵衛の太刀には樫の木の柄をつけて、野太刀風に作ってそれを振り回したと伝えている。

「却説」安兵衛は、古武士のような一徹な心の持ち主であり他方、書道も一方の師であり、ひろく能書家として信用されていた。

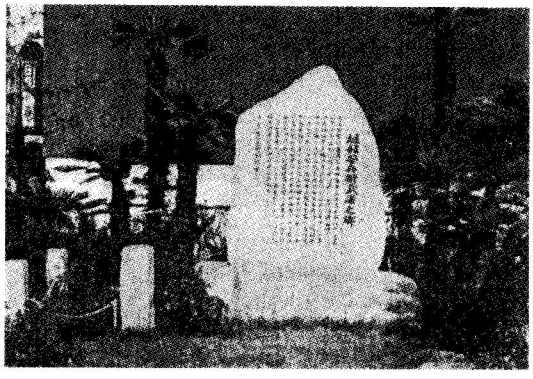
討入りまで本所林町にて剣術師範長井長兵衛と名乗った。

討入りの武具その他の用品は、みんな安兵衛の用心深さを信頼して、その家に置いていた。

討入りの直前、往復文書数十通をまとめて儒者細井広沢に送っている。これが「武庸筆記」で、貴重な義士討入り資料になっている。沈着で日配りがきいていたのである。

討入り後は松平家に預けられ、いよいよ切腹のさいは、大石主税と共に一同を代表してお礼の挨拶をした。

梓弓ためしにも引け武士の
道は迷はぬあとと思はば（安兵衛辞世の歌）



安兵衛住居跡の碑（東京都中央区八丁堀）

討ち入りの日の堀部安兵衛

# 無駄打ちのこと

審議員教士七段　山田冨康

(1) 無駄打ちについて

打つべきときに打たず、打ってはいけないときに打って有効打突とならない一本、これを無駄打ちと言う。剣道試合・審判規則第一七条一項では、有効打突は充実した気勢、適法な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものと規定されています。

試合には絶対有効打突（一本）が必要だし、六段七段の試験で打ちすぎたら通らぬといわれているのは無駄打ちが多いからで有効打突なら何本打ってもよい。しかし一分や二分の間にそう打つ機会が何本もあるとは思えない、せいぜい二、三本であるまいか。

無駄打ちは打てば打つ程減点されるのである。それでは有効打突を打つべき機会とは、

(2) 打つべき機会

① 急居尽受去迷来
② 攻めと誘い
③ 竹刀落とし、倒れた所
④ ボーッ　油断
⑤ 四戒　驚懼疑惑
⑥ 虚（実）
⑦ 隙（心、構、動作の隙）
⑧ 三殺法　竹刀、技、気を殺す
⑨ 一足一刀の打間（間合大切、かかり稽古の重要性）我より近く相手より遠く
⑩ 二つの許さぬ所、出頭（起こり）、受けた所、尽きた所
⑪ 気剣体の一致、心気力、心眼足
⑫ 懸待一致

試合規則第一七条（有効打突）

有効打突は充実した気勢適法な姿勢をもって竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し残心あるものとする。（I項・II III）

(3) 打突の機会（詳論）

① 出小手（間合大切）。
② 遠間から打たない（打間を考える）。
③ 一歩踏み込んで（攻め）相手の動きを打つ。
④ 相手の小手の隙を打つ（居付、出ばな）。かかり稽古の重要性（間合の感（打間）と特にいつでも打てる感を養う）。
⑤ 相手の竹刀（剣先）上がれば小手、下がれば面、上を攻めて下、下を攻めて上を打つ。
⑥ 追込んで面を打つ、下がれば追込んで打つ。
⑦ 追込んで竹刀立てれば小手、下げれば面に飛び込む。
⑧ 居ついた所、動き止まった所、打ち終わった所など。
⑨ 受けたら打つ（応じ技、返し技、ぬき技）。小手返し面、面すり上げ面、面受けて胴など。
⑩ 小手—面（二段打、三段打）

(4) 攻めとは何ぞや

① 中心を攻めて打つ（相手の鍔を攻める）。
② 突きで攻めて打つ。
③ 誘って打つ（かつぎ技、面を見せて小手）。攻めて相手を動かせて、見て、ためて打つ。攻め誘いのとき乗られぬ様気をつける（出頭を打たれる）。特に気をつける。
④ 打つべき機会を作る
気位で圧する、わざで圧する、力で圧する。
⑤ 先で打つ（懸待一致）
角刀の攻めも同じ、待っていては先をとられる。引いたら駄目、一寸でも前へ出る。
⑥ 小手打ち面と同じ位飛び込んで打つ、手先だけで打つと抜いて面を打

たれる。

(5) 足さばき（体さばき）のこと

一足一刀（飛び込み足）、送り足、歩み足、左右開き足。

(6) 稽古のこと

打突の機会とか有効打突とか、本とることの要点は色々説明され、あるいは納得出来るが、サテ、今まで書いたことを全部覚えてしまえば試合に勝てるか、あるいは強くなれるかと言うと、さにあらず、剣道は頭で考えるものでなく身体で覚えるものです。

かかり稽古の重要性もこのことを言っているのです。無意識に体が動く、打つ勘を養う、これは一に練習（稽古）しかありません。

だから小さい子供でも一回より二回常に人より多く稽古する子供、休まず道場に来る子供が結局は強くなって頭角を現す。休む子やいやいや稽古をしている子供達は脱落していきます。

そして稽古は若い中にしましょう。だんだん年をとってくると体力も落ち、結局日暮れて道遠しの感が深くなって来ます。そして剣道は一生つづけてしましょう（生涯学習）。

趣味としても、健康法としても、死ぬまで出来るとても楽しい剣道です。

参考資料　「剣道　攻めの定石」　教士八段　佐藤成明先生
「剣道日本」各号特に平成五年七月号

# 人物紹介（各支部より）

## 〈小松島支部〉

## 〈己に克つ〉加林惠祐　五段

小松島支部長　田村直一

### 若い世代に剣道を教えて三十年
### 夜毎夜毎精魂を注がれる

若い世代に剣道を受け継いでもらいたいという願いをこめて、加林惠祐氏は子供達との出会いを大切にして昭和三十九年より今日まで一年一日のごとく少年剣道クラブの育成とその指導に精魂を注がれていられる。

高校時代松本一城先生に導かれ、当時はまだ「撓競技」といわれ全日本撓競技連盟としての流れがつづいていた時代で、剣道連盟としての組織結成が進められてきたのは昭和三十年代に入ってからで、足搦み、体あたり、自然発生的以外の掛け声の禁止などが規定され少年剣道指導上にもいろいろと配慮することに意を用いられたという。そんな昔をよく知っていられる。

昭和三五年に陸上自衛隊に入隊後も隊の剣道部選手として多くの剣友と交わり稽古三昧、身も心も剣道に投げ入れた。

〃想い出を語る〃「加林よ」「剣道を本気でやれよ、選手になるんだ」と……松本先生の言葉があった。……「よし剣道をする」と誓ったあの時あの気持ちを今も忘れないという。

「寒流帯月澄如鏡」武蔵の書をもらった。

試合に負けたときも松本先生は、加林あれでよいんだ、最初の立ち上がったとき、面の中から光るものがあった。アレが大切なのだ。……が　持続できなかったから負けになった、と。

いつも奥のある言葉で指導していただいたことを忘れずに、現在は少年達にもそうした心を配り注意ぶかく見守って指導につとめていると語る。三十年の長い指導歴の光が氏の温顔の中に輝き、その両眼から溢れ出ている。

剣道五段（昭和五八年）小松島市大林町の農家に生まれ（昭和一六年）少年の頃から近くの新開小学校で父、加林茂夫氏の運営する公民館の社会教育関係の各種事業にも参画し少年頃より地域社会のボランティア活動に父子共に参加して奉仕活動につとめられた。（育英館長加林敏夫氏は令弟）

一座右の銘」〃己に克つ〃

お人柄は「自分を前に出さない方で仕事をまかせられる」信義に厚い人である。（勤め先・阿南市桑野町福助タビ株式会社）

新聞少年剣道教室、和田島少年剣道教室、育英館道場、芝田剣道教室（昭和42より52年まで）

右の各剣道教室の夜間授業に一週間中休みなく東に、南にと東奔西走して一日も休むことなく、雨にも雪にも負けずその情熱を剣道の普及と少年達の健全育成に誠心誠意精励されているお姿に対し、私共はいつも畏敬し讃仰しているところである。

小松島支部の中心的指導者として、県連盟の評議員歴も十余年に及ぶ。支部主催の研修会、少年剣道大会の実行委員長として運営にも精魂を致されている。「誠是天道」の言句のとおりの実践者である。何十年の間、夜毎夜毎の剣道教室の巡回は加林氏の横溢せる崇高なる奉仕の精神がなければできない。輝くその瞳、汗に焼かれた健康色の頬、少年をこよなく愛する慈愛の眼差し、己を飾らない言動は正に剣聖である。

1　小松島市体育協会長表彰（昭和六一年）

2　徳島県剣道連盟会長表彰（平成三年）

## 〈名西支部〉

### 遠藤英雄　（六十五歳　剣道教士五段　居合道教士五段）

居合道無双直伝英信流（大江派）を故須見善富範士に師事し、先生亡後は石井隆介（寒泉）先生、下村富夫先生、共に故人となられたがご指導を受け、今日に至るまでひたむきに稽古を続けられています。

先生が剣道を始められたのは十二歳、昭和十六年第二次世界大戦緒戦の頃、石井町高原在住の高橋静夫先生に手解きを受けられ、昭和十八年に海軍志願兵として入隊されたが終戦、剣道が禁止され稽古を休んでいました。昭和二十五年徳島県社会体育剣道クラブ会長尾形郷一先生より剣道初段を允許され、爾後剣道具を担いだり自転車に積んだりして、西へ東へ道場巡りを続け昭和三十六年剣道五段に昇段し剣居一如の精神で精進されています。現在は石井町の重井好高館長の右武飯道場で師範代として活躍されています。

## 〈美馬西支部〉

### 塩田国重　（四十歳　初段）

美馬郡貞光町字馬出八八の八
四国電力勤務

私は中学生時代、少し剣道をしていましたが、その後二十数年竹刀をもつ機会がありませんでしたが、私の次男が内気な性格なので何かスポーツをさせたらと思い剣道を勧めました。次男が「お父さんも一緒にするのならぼくもする」と言うので始めようと思いましたら長男、三男も一緒にしてみたいと言うので親子四人で貞光剣道教室に入門させていただきました。

先生方も快く受け入れてくれました。

最初に礼儀、基本など教えていただき三カ月ぐらいしてから防具を着け、より一層稽古に励みました。

先生方の熱心な指導により、私も初段になり長男も二級に合格しました。次男も四年生になったら五級を受けるつもりで頑張っています。

長男は拳法初段をとっていますが中学二年で剣道初段を受けるというので、今年から剣道一本にしぼっています。

剣道を始めて礼儀、精神力など先生方から学び感謝しています。

これからも親子、それぞれの目標に向かって練習に励んでいきます。

### 西原仁　（四十一歳　五段）

私は現在半田少年剣道教室で子供達を指導しております。生徒は小学一年生から六年生までで週三回近くの公民館で汗を流しています。こちらに来るまでは子供を指導したことはなく徳島市内の親導館で一般の人達だけの稽古でした。親導館では竹原先生を初め勝浦先生、西野先生に稽古をつけてもらいました。掛り稽古ばかりの激しい稽古でしたので子供相手の剣道に変わった時は何か物足らない気がしていました。この事を竹原先生に話すと「子供と思ってバカにしてはいけない、子供を教えることによって品がつくんだよ」と言われました。この言葉には目が醒める思いでした。今まで自分だけが強くなればいいと思っていましたがこれからは自分だけでなく子供達も一緒に上達して剣道の面白さを知って中学生、高校生になっても続けてほしいと思います。私はまだまだ模範となる剣道ではありませんので子供達とともに正しい剣道が出来るよう努力したいと思います。

# 〈徳島支部〉

## 森　篤史（徳島大学光応用工学科助手　昭和四二年一月七日生）

徳島剣道連盟　徳島支部長　馬　場　　力

彼は岐阜県武儀郡武芸川町に生まれ、周辺は雄大な山また山に囲まれた静寂な山村である。父は岐阜市内の高校で物理専門の教員、母は関市の職員であります。

彼は二人兄弟の長男であり、二男は岐阜大学病院にて研修医を務める予定、末弟は現在大学生、彼の希望としては地元の学校の教員として働いてくれたらと思っているそうです。彼ら兄弟は祖父母に育てられました。祖父母は何時も両親の自慢話を聞かされて育ち、その両親の生き方を見て、現在も尊敬し誇りに思っております。

彼が現在の道を選んだのは、その影響だそうです。父がいろいろの事情により自分の希望する道に進めなかった話を聞き、尊敬する父の望んでかなえられなかった道に進もうと決心したからであります。

祖父母は農業の傍ら蚕や鶏を飼い、有名な美濃紙の原料の「こうぞ」の採取をしていました。彼は祖父母の手伝いをしており、祖父から心身を鍛練するには剣道が良いのでないかとの話を聞き、母は剣道をすることには反対であったが、小学生時代、母の反対を押し切り兄弟そろって武芸川剣道教室に入門したそうです。教室の指導者は井手先生と右腕が使えず左上段で剣道をやられている伊藤先生でした。稽古は週三回、厳しい稽古で腹筋がけいれんして呼吸が出来なくなるまで教えて頂いたこともありました。

中学校に入ると体育の授業には正課に剣道があると友達と語り合い、今からシッカリと稽古し、身体を馴らし腕を上げ、そして剣道大会に出場しようという大きな夢を抱きました。関市では年に一回刃物祭り剣道大会と称する行事があります。（「関の孫六の名刀」を思い出しペンを走らせております。）その大会に武芸川中学校剣道部から参加、結果は4対1の惨敗、皆一分足らずの負け、彼は中堅で出場、小手を一本取り、後深追いせずに構えていたら時間と成り、自慢の出来ない試合内容ですが大変嬉しい勝利でした。母親は剣道に反対していたが反対を押し切り試合に出て勝つことができ、成果をだすことができたので闘志が湧いてきました。

高校入学と同時に剣道部に直行して入部、先生は坂田七段元国体選手、山本先生という立派な二人の先生に恵まれご指導を受けました。一生懸命に稽古に励みました。高校時代、幾度となく剣道大会があったが残念ながら選手としての出場の機会はなく残念に思いながら卒業した。

名古屋大学へ進み、四年間理学部、二年間工学部で学んだ。平成三年春徳島大学光応用工学科助手として採用され勤務。ここでも就職のことで母にずいぶん反対されたそうです。一度決めたことはやりとげる、論語に「予れは一以て貫けり」という言葉があります。父のように志を断念し悔いを残すようなことのないようにしたいということの現れでないでしょうか。

七年間剣道のブランクがあったが一応落着きができて、忘れることのない剣道を再開、自分で稼いで買った剣道防具を手にしたときは本当に嬉しく思い、これからやるぞと叫びたい気持ちであったと……。徳島大学の初めての練習、切り返しだけで精一杯、息がすぐ上がった。身がなまっていることに気がつき徳大剣道部だけで剣道を続けていたが、平成四年の夏頃より中央武道館へも水曜、土曜に剣道の稽古があるので参加、石井範士、勝浦先生、西野先生等諸先生方にも大変とお世話になり、稽古をつけて頂いております。徳島へ来てよかったと感謝の気持ちで一杯とのことであります。西野先生に教えて頂くと、もっと遠間から打ち込んで来なさいと言われます。上半身だけで突進し下半身がついていかず悩んでいるそうです。「無理をして身体を壊したら元も子もない」と体型の悪いことは見通して注意をして下さって、彼の上達に合ったようなご指導をして頂いています。彼は現在遠間から打ち込む練習に一生懸命とのことで平成七年春の昇段試験受審、三段目標に頑張っているそうです。

稽古ごと　たやすいようで　むずかしい
習うことより　つづけることが

# ＝剣道随想＝

## 〈板野西支部〉
## 剣道との出会い

元木　武

私も振りかえってみると、剣道を始めていつの間にか二十数年が過ぎた。高校入学時、同じ中学校の先輩に勧誘されたのがきっかけだった。小学生の頃より体が弱かった私は一年生の夏の合宿についていけず九月上旬に同級生三人と共に主将のところへ退部届を出したが、この先輩に上手に口説かれ、その後自分なりに一生懸命練習した。

卒業後は、勤務先に同好会が有りそこで練習していた。しかし、三交替などの勤務時間によるすれ違いで社内での練習もなかずとばずになっていった。そんな時、社内の剣道仲間より藍住で社会人が盛んに練習していると聞き通い始めた。ちょうど夏場で、練習が終わると一リットルの清涼飲料水を飲むほど疲れていたのを覚えている。

そして、藍住に稽古に行き始めた数年後、藍住のメンバーの一人金西重記（現在、板野西支部長）さんに誘われ旧県立武道館での朝稽古に通い始めた。堀江会長・大沢副会長両八段を初め、高段者の先生方、警察官、教員、一般社会人、学生と多彩な顔ぶれだった。稽古は、待つ時間を除けば息を抜く暇もなくつらかった。それに冬場の早起きと、踵の皮膚が裂け踏み込む度に痛みがはしったのにはまいった。朝稽古に通い始め三～四年後、県立武道館が移転することになり「朝稽古会」が解散することになった。しかし稽古はもちろん、堀江会長の稽古後の訓話は私の剣道（人生）の中で最も忘れ難い「道場」であった。

私の場合、大きく分けると三つの節目「出会い」により剣道を続けることが出来た、また技術をも高めることが出来たと思っています。いや、それ以上に大切なことは節目ごとに人との出会いという「円」の半径が徐々に長くなっていったことである。小さな「円」だと、稽古相手も情報も限られてくる。しかし「円」が大きくなれば、いろいろな個性を持ち合わせた剣道家と稽古ができると同時に情報（剣道の教え等含み）も得ることができるということは、まことに嬉しく楽しいことだと思っています。

現在も「円」の中心である、稽古と同じ位（いや、それ以上かな！）酒好きな集団である藍住「知友会」でお世話になっています。「円」を広げようと思っている方はどうぞ。

練習日時場所、毎週火・木・土、午後八～十時、藍住町武道館。

## 〈名西支部〉

石井町役場勤務　鎌田克己

（昭和三八年一二月二八日生）

幼少期テレビアニメでお馴染の赤胴鈴之助に非常に興味を持ち、初めて竹刀を握ったのが小学校四年生（十歳）の時、これが私と剣道との出会いでした。当時、小学校のクラブの講師をなさっていた遠藤英雄先生（現石武館教師）に手ほどきを受け、剣道修行の道に足を踏み入れました。以後、高校（川島）の剣道部に入部し、乾寿夫先生や諸先輩方からの御教示により根性、鍛練、精神修養の大切さが分かったように思います。その結果として徳島高校選手権、高校総体とまずまずの成績をあげ四国大会（愛媛）へも出場することが出来ました。

また、夏の合宿（徳島県警機動隊との合同練習）では、剣道の厳しさ、苦しさを痛感しました。大学卒業後、一時期中断したこともありましたが六年くらい前から重井好高先生（石武館道場）にお世話になることになり、二十年程剣道を続けていることになります。

石武館道場では少年剣士の育成のため、一心不乱に稽古されています諸先生方の御指導は、子ども達さながら私自身人間形成の向上につながっているように思われます。昨年の九月二十一日に五段に昇段することが出来ました。これも偏に諸先生方の親身な御訓導のお陰だと思っております。今後は、剣道人としての見識、技の理合を少しでも多くつかみ取っていき、一期一会を大事にしていきたいと思います。自らの名前「克己」に負けないように剣道を通して精進していく次第です。

## 〈海部支部〉
## 剣道と素振り

丸岡偉人

私が剣道を始めたのは、十八歳の大学入学後である。少年剣道で始めたり、遅くても中学校で始める人が多い中、かなり遅かった気がしている。もちろん同級生は二段や三段の経験者がほとんどだった。そこでまず先輩に教えられたのは足さばきと素振りであった。中でも素振りはよくやったものである。何とか竹刀が振れるようになると一日に千本単位で何回も振らされた。友達にも恵まれて、なんとか四年間続けることができたが、卒業とともに中断、身のまわりから剣道具は消えてしまい剣道をやっていた証に三段の賞状と卒業祝いの木刀が残った。

剣道再開はずっと後で、帰郷後長男が小学二年生になった時、何かスポーツをさせてみたいと思いまわりを見ると海南町大里で西山勝喜先生が指導する海部川剣道教室があった。迷わず幼稚園の二男と共に入室させ週二回の送迎が始まった。これが13年振りに竹刀を握るきっかけとなった。練習を手伝うようになり足さばきや素振りの基本から始めて、面をつけてやってみると学生時代は苦しくてしんどい思い出だけだった気がする剣道が、実に楽しいものになっているのに気がついた。特に稽古が終わった時の心地良さは、少年剣道を指導している充実感とともに学生時代に剣道をやっていて本当に良かったと思ったものである。素振りも五百本ぐらいを目標に今でも週に何日かは振るよう心がけているが、現実はなかなか厳しい。

この間、少年剣道との関わりも10年余りとなり、今は縁あって地元の海南中学校の剣道部を手伝っているが、生徒達にも素振りの大切さを教えていきたいと思っている。そしてここで育った少年達が将来一人でも多く剣道を続けてくれることが、私達少年剣道に携わる者の夢でもある。

学生時代に何となく始めた剣道が、今では生活の一部にまでなっていて、これからも益々のめりこんでいきそうな気配である。剣道にはそのような魅力があると思っている。

平岡竹雄先生をはじめ西山勝喜先生、森本好美先生等ご指導の先生方にも恵まれて海部郡内の剣友との稽古が楽しみなこのごろである。

## 剣道と共に

海南高等学校一年　森本春輝

僕は剣道を小学一年生の時からずっと続けています。最初はただ竹刀を振り回していただけだったように思います。それが小学四年生頃になると勝った時の喜びそして、負けた時の悔しさを知るようになりました。悔し涙を流したのもその時でした。僕がますます剣道に力を入れたのもやっぱりその時からです。それと僕は剣道のおかげで尊敬する先生や心から信頼できる友達と巡り会えました。今思うとそれが一番良かったと思います。これからそんな先生や友達と共に僕が中学最後の試合県中学総合体育大会を目標にして剣道に打ち込んだ時の話をします。これは僕が剣道をしてきて一番心に残っていることです。

あの時、試合が近づくにつれ練習が厳しくなり、先生に怒られる回数も増えていきました。学校や遊ぶ時いつもいっしょの仲の良い友達も剣道の練習の時は試合のレギュラーを狙い激しく競い合いました。誰もが五人の中に入りたいという気持ちを胸に練習に打ち込みました。他の学校の中学生と剣道

をして競い合うのとは、またちがうものがありました。いっしょに試合に出たいけれど、レギュラーはゆずれない、こういった気持ちがありました。そんな中で僕は初めてスランプというのになりました。僕だけじゃなかったと思うけど面一本を打つのにも打てなくてやればやるほど自分の理想から遠ざかっていくのです。僕はその時剣道の恐さを知りました。でもそんな時、先生が僕に自信をつけさせようとアドバイスをしてくれました。友達も自分の事で精一杯なのに僕の事を心配してくれました。すごくうれしかったのを覚えています。そしてみんなのおかげでスランプからぬけることができ試合当日には良い調子で面をつけることができました。試合が始まるとこれまで練習してきた事がそのまま試合にでて順調に勝ち進みました。そして今でも忘れません、準決勝の阿波との試合は実力はほとんど互角でした。先鋒から大将までやって同本数でむかえた代表戦、相手チームは僕と試合をした先鋒、こちらは調子の良い大将がでました。僕はこれをコートの外で拳をにぎりしめて見ていました。やはりどちらも互角でした。その時です、体のバランスをくずした所にいいタイミングで面をとられました。

こうして僕たちの長い夏が終わりました。今ではみんな別々の高校へ進み、そこで剣道を続けている者、やめてしまった者それぞれいます。でもたまに集まった時にあの時の話をします。みんな僕より覚えています。こうやって話ができるのも剣道を続けてきたからだと思います。僕はこれからも剣道を続けていきたいです。そして剣道と共に生きていきたいです。

## 〈麻植支部〉
## 剣道と居合道と私

鴨島第一中二年　桑　原　愛　奈

私が剣道を始めたのは、小学一年生の時でした。私の兄が鴨島少年剣道教室に入会していたので迎えに行く時について行き見学して「おもしろそうだな」と思ったので、剣道を始めるようになりました。

鴨島少年剣道教室には平尾勝美先生をはじめ立派な先生方がたくさんいらっしゃいます。最初は基本をみっちり教えこまれました。竹刀を持たずにはかまを持ち上げ、すり足の練習から始まりました。いろいろな練習を進めていき、竹刀を持ち、防具をつけるようになるまで半年かかりました。たれをつけ、胴をつけた時、動きが自由にできなくて、その上面をつけた時は頭がとても重くてふらふらしました。大きな声を出し先輩方にかかりげいこをさせてもらいました。そのおかげで、たくさんの試合につれていってもらい何回かメダルや賞状を手にすることができました。

剣道をしながら居合を始めるようになったきっかけは、平尾先生が「居合をしたい者」と言った時です。それは私が五年生になった時です。迷わず私は、「居合がしたい」と思って手をあげました。居合も剣道と同じで、礼儀と基本が大切です。竹刀を刀に持ち替えて、神殿の礼から始まりました。連盟居合を十本まで習った時から試合に出場できるようになりました。居合を好きになり始めたのは、宇和島大会につれていってもらい一回戦で負けた時です。六時間もかけてこんな遠い所まで来て負けるよりか、来年ここへ来た時は、なんとか賞をもらえるように一生けん命練習しよう、それには、居合が好きになるのが一番だと思いました。

それからは高知大会、伊予大会、琴平の奉納試合そして思い出に残っているのが、昨年の七月に県代表としてつれていってもらった、大分大会です。団体戦の初段の部で出場させてもらい三回戦まで勝ち進みベスト8になりました。

剣道も居合も共通して気迫を感じることが大切ですが、居合は特に静けさの中に相手からの気迫をどれだけ感じとるかが自分の動きをよりよく見せるものだと思いました。

これからも剣道や居合を続けていくために、礼儀や作法を守り一生けん命練習にはげみたいと思っています。

# 剣道とのであい

山川スポーツ少年団修錬館　小学六年生　源　征治

ぼくは、小学三年生のころから剣道を習い始めました。剣道をはじめたきっかけは7才上の兄が小学四年生から中学三年生まで剣道をしていました。それをみていて自分もやりたいと思って習い始めました。

剣道をはじめると最初はきついスポーツだと思ってしんだい気持ちがありました。でもだんだん続けていくと体力がついてきて、しんだい気持ちがなくなりました。そして、なかなかできなかったはやぶりができて、とてもうれしかった。

初めて防具をつけたときは、うれしかったけれど実際にやってみると防具が重くてなかなか思ったようには動けませんでした。夏の練習はとても暑くてあせがだらだらでてとてもやりづらかったけれど、一年二年と続けているうちに体がなれて剣道具の重さも気にならずに、今ではすばやく動けるようになりました。

初めて試合をしたときあまりのきん張で体がなかなか動きませんでした。それで試合はまけてしまいました。その時はとてもくやしくてたまりませんでした。一回、二回まけるくやしさをわすれないように次の試合でがんばるといい成績がでました。だからこのまけた時のくやしさが大切なんだと思いました。

今、剣道をしてたいへんよかったと思います。それは忍耐と精神力・集中力・反射神経が養われたと思います。だからそのほかのスポーツをやってもうまくいくようになりました。

指導者の先生方には常にこまかい基本を教えられます。なかなか先生の教えどおりに体が動きませんが努力を忘れず、期待にそいたいと思っています。

中学、高校、大学とぼくは剣道をつづけ、自分の剣道をめざしてがんばりたいと思います。

# 〈板野東支部〉剣道とぼく

誠武館道場　藍住東小学校六年　二級　中村幸平

ぼくは、小学3年生の10月くらいから剣道を始めました。初めのころは練習がかんたんで、

「面を早くつけたいなあ」

と友達同士で話したりしました。ところが面をつけるころになると練習は長いし、しんどいので1カ月に1回は、

「早くやめたいなあ」

といっていたりしました。でもせっかく始めた剣道をやめるわけにはいかないので泣きそうになりながらもがんばってみました。そして初めての試合がやってきました。内心、

「ゆうしょうできるだろかな」

なんて甘い考えをもっていました。

「始め」

「面」

「小手」

あっさり二本とられて負けてしまいました。そのとき自分でもなにがおきたかわからずこんらんしていました。そして、自分の練習ぶそくということがいやというほど分かりました。その後何回も試合を経験しました。一回戦、二回戦と勝ち進むことも出来る様にもなりました。しかし、それ以上はむずかしく残念です。道場での指導の中でよく出てくる練習の基本を正しく、大きく、早くをモットーに努力を重ねていきたいと思います。

# 僕と剣道

試武館　北島南小学校六年　一級　育田将明

僕が剣道を始めようと思った訳は母と車でドライブをしていると、剣道の格好をし、自転車に乗っていた人が2人いたのを見たときです。すると母が「剣道をしなさい」と言ったので、剣道を始めました。母が「剣道をしなさい」と言った訳は、礼儀作法など身に付けるためです。僕はその訳を知り納得したから剣道を始めたのだ。今でも剣道をはじめて後悔はしていない。だからこそ、今でも剣道をやり続けているのだ。ときどき先生に叱られ、剣道なんかやめたいなどと思ったこともあったが、めげずに剣道をやり通してきた。だからこそ、賞にもたくさん入ってトロフィーやメダルをたくさんもらった。賞に入った時はとてもうれしかった。その時は、剣道を続けてきてとてもよかったと思った。僕は試合中、気がぬけていて相手に負けたことが何回もありました。だから、今、試合中に気をぬかないように努力しています。何回かそのことで叱られたことがありました。叱られてから気をぬかないようにしたらだんだんと試合に勝てるようになりました。このことをばねにしてあと少しの小学生での剣道生活を頑張りたいです。

中学生ではクラブ、部活は絶対に剣道を続けもっともっと強くなり、先ばい達に対抗できるような力を付け、先ばい達といっしょに続けていきたいです。試合に負けてもくじけずに頑張っていきたいと思います。

# 〈阿南支部〉六年間の剣道の思い出

大野小学校剣道部六年　一級　大前智仁

ぼくは、小学校一年生の五月大野小学校剣道部に入部しました。初めて防具をつけた時面が重くて首が傾いてしまいました。西岡侃先生や森口求先生に面タオルの着け方やはかまのひもの結び方に始まり、声の出し方防具やたれのしまい方まで手をとって教えてもらいました。そして一年生の夏、阿土大会ではじめて優勝した時、家族以上に喜んでくれたのが西岡先生と森口先生でした。メダルがとても重く感じたのを今もはっきり覚えています。

でも、ぼくが三年生の時大変かなしい事がおこりました。ぼくにとって本当のおじいちゃんのようなやさしい森口先生が急になくなってしまったのです。「全国大会には必ず智仁君と一緒に行くからな。」と励ましながら教えてくれた先生だったのに……。その後、各大会終了ごとに大好きだった酒をもってお墓の前で試合の結果を報告しています。そのたびに「また次もがんばれよ。」という声がきこえてくるのです。もっともっと生きていてぼくの剣道を見ていて欲しかったとつくづく思います。四年からは、池田洋一先生、西岡直彦先生の教えも受けるようになり道場が急ににぎやかになりました。寒い夜の厳しい練習、むし暑い日の練習、何度も休もうと思った事もありましたが、そのたびに一日休むと二日休み二日休むと三日になるから自分に自分をふるいたたせ先生方の二段打ち、三段打ちなどの激しい攻め方にもギブアップしないようにがんばりました。その成果もあって平成四年十月十日、直彦先生の結婚式の日に徳島ライオンズクラブ大会で高学年、低学年共に団体優勝し優勝旗や金メダルを胸に全員で結婚式場にかけつけ、直彦先生を驚かせてしまいました。また、小学校五年六年と二年連続で全国防犯少年剣道大会に県代表として出場しました。試合会場の東京警視庁武道館は広く、全国各地からすばらしい仲間が集まっていました。結果は決勝リーグへは進めなかったもののいろいろな人と一緒に寝たりごはんを食べたりすることで友達との

交流も深めることができました。試合になると、県内の大会では味わえないすごい迫力がぼくの体につたわってきて、特に、九州の選手のすごさには圧倒されてしまいました。いったいどんな練習をしているのだろうとあっけにとられながら日本は広いなあ、もっと練習を重ねて中学生になってもぜひ来たいと思いました。それから、平成五年七月二十九日香川県の高瀬町で行われたB&G四国大会にも出場して優勝し、愛媛県大三島での全国大会までいったのに台風のために中止となりました。幻の大会に終わってしまったことが残念でなりません。そしていよいよ全国スポーツ少年団剣道交流大会が三月二十七日から戦国時代の武将武田信玄ゆかりの地、山梨の甲府市で開かれます。ぼくが四年生の時からねらっていた大会にやっと出場できるようになって、うれしくてたまりません。六年間剣道を学んだ総仕上げとしてがんばってきたいと思います。

何事も優勝することはむずかしいですが、ぼくは幸運にも何度かその喜びを味わうことができました。それは、厳しく温かく教えてくれた先生、剣道を共に学んだ仲間、励まし続けてくれた家族があったからです。これからも一年生の初めてもらって阿土大会のメダルの感激を忘れずに毎日努力し、すばらしい先生方との出会いに感謝し、自分にきびしく生きたいと思います。ぼくは今、剣道という山のふもとに立ったところです。剣道の心をしっかりみがきながら頂上まで登っていきたいと思います。

## 楽しい剣道

大野小学校剣道部六年　一級　遠藤浩史

四歳年上の姉が剣道をしていたために、刺激され小学二年生より剣道を始めました。思い起こせば多くの大会に参加する中できびしさと楽しさを教わったように思います。

試合では、一勝ち負け一があります。勝てばうれしいし負ければくやしいのが人間です。しかし、人によっては勝たなければ気がすまない人もいれば負けても一生懸命努力し、少しでも成長した自分を発見して満足する人もいます。また、最初から楽しめばいいという人などさまざまです。けれども、剣道は健康で好きでなければ自分から進んでやるというより〝やらされている剣道〟になってしまいます。

私たちは、今後とも剣道の理念を正しく理解し、つらいこともあるが、楽しいことが一杯ある剣道を、先生の指導を受け、両親、友達の励ましを受けながら、がんばっていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

## ぼくと剣道

阿南剣道教室　六年　土井良典

ぼくは四年生の時に母にすすめられて剣道を始めました。母は家に閉じこもりがちなぼくに社交性や礼儀、作法を身につけ、体力をつけるために、ぼくに剣道をさせたかったようです。そのころ、日本の歴史にすごく関心をもっていたぼくは武士の精神をきたえる『剣道』に興味をおぼえ、好奇心とでぜひやってみようと思いました。

初めのうちは、はかまの着装、めんのつけ方、竹刀のふり方などめずらしいものばかりで練習日を楽しみにしていました。新野大会で、初めて敢闘賞をもらった時はとってもよい気持ちでした。

でも、そのうち楽しいことばかりでないことに気がつきました。冬になると剣道着が冷たく、裸になって着るのがおっくうで、夜冷えてくる体育館での素足の練習もつらいものでした。また、思ったより練習回数も多く、学校の宿題が多い時は大変でした。何度も母にせかされながら剣道教室に通ったものでした。

そんなぼくも六年生。剣道一級の資格もとりました。阿南剣道教室へ通うのもあとわずかです。家ではわがままをいうぼくも教室ではいいません。週二回は、みんなの前で号令をかけられるようになったし、以前の弱いぼくとはちがいます。体力がついてきたのもなによりもうれしいことです。また試合での気合、闘志だけは人には負けません。阿南市の体育祭の時、大潟の武道館で選手代表の宣誓もできました。これは、ぼくにとって一つの大きな自信になりました。チャンスを与えて下さった先生方や先輩に感謝したいです。

これからの目標は、心と技をみがくことです。もう甘えを捨てて自分に厳しくしていきたいと思います。

# 徳島の剣道

## ――各パートからの報告――

### 高校の部

城南高校教諭　大石正志

高校剣道の平成五年度を振り返ると、女子は富岡東が実力どおりの力を発揮し、県内の全大会を制した。男子は国体強化指定校の城ノ内、小松島両校が新人大会、全国選抜県予選の優勝を分けあったが、県高校総体では城ノ内が栄冠を獲得した。東四国国体では強化が実り少年男子準優勝、少年女子ベスト8と、剣道競技総合優勝に大きく貢献することができた。選手、監督、コーチの労をねぎらいたい。また、長年強化指導していただいた数多くの先生方に、そして競技補助員として頑張った生徒諸君に感謝いたします。

富岡東女子は四国大会準優勝、全国選抜大会第二位、全国総体ベスト8と、実力は全国トップクラスになってきました。さらに全国制覇を目指して一層努力してもらいたい。男子も実力ある選手が育ちつつあり、必ず四国・全国大会で活躍してくれるものと思います。

ここ数年、高等学校の剣道人口の減少が大きな問題点です（一、二年女子七〇名、男子一七〇名）。原因はいろいろ考えられますが、各専門部と連携を図りながら問題解決に努めていきたいと思います。今後とも先生方のご協力ご指導をいただけますようよろしくお願い致します。

### 中学校の部

鷺敷中学校教諭　富田　正

本年度を振り返ってみると、やはり国体一色という感じであった。その中にあって、各中学校が地道に努力していただき例年のような成果をあげることができたということであろう。

さて、六月の県中剣道選手権では、男子五十五校、女子四十一校の参加があり、まず男子は市場中と鷺敷中の決勝戦となり、大接戦の末、代表戦で市場中が制し、女子は常勝の那賀川中が市場中を3対1で下し3年連続の優勝を飾った。

次に、七月の県中総体では、先の県中剣道選手権でベスト4であった鷺敷中、那賀川中が郡予選の段階で姿を消し、新たにどこが市場中を苦しめるか興味があったが、決勝戦では市場中が阿南中を5対0で下し難なく優勝した。また、女子も那賀川中が市場中相手に一本も許すことなく圧勝し四国大会、全国大会出場への切符を手に入れ連覇への夢をつないだ。個人戦においても団体優勝校同士の戦いとなり、ともに男子では本県No.1の日和田（市場中）が近藤（市場中）に勝ち、女子では全国級と言われる坪井（那賀川中）が賀川（那賀川中）に勝ち3年連続チャンピオンとなった。

次に、四国中総体ではこのところ本県チームは素晴らしい活躍をみせており、今回も特に期待しながら参加することができた。まず男子においては市場中が決勝戦で敗れたものの準優勝、女子は那賀川中が2連覇をかけて決勝へ勝ち進んだが、惜しくも土佐女子（高知県）に敗れた。男子個人戦においては、森本（文理中）が第三位、女子個人戦においては坪井（那賀川中）が2年連続の優勝となった。

八月に京都府で開催された全国中学校選抜剣道大会では、那賀川中が昨年の勢いをと、連覇の夢に燃えたが、全国の壁は厚くベスト8で京稜中（熊本県）に敗れた。連覇を狙えるチームだけに残念であるが、これを糧に次の段階で花を咲かせてほしい。男子の市場中もかなりの実力を持っていたが、男子は女子以上に厳しいものがあり予選落ちとなった。

十一月には新チームとなって初めての県大会である県中剣道新人大会が行われ、男子決勝は阿南中と那賀川中との対戦となり阿南中が9年ぶりに優勝、女子は創部2年目の相生中が石井中を破り初優勝に輝いた。しかし、男女ともまだ安定した力はなく今後の取り組み次第で、どの学校にもチャンスはある。

本年度は、48国体の開催年でもあったため国体成功へとみんなが一丸となって取り組んできた。その成果を考えたとき、日々の錬磨なくしては実力のあるチームはできないということは確かである。しかしながら、昨今特に、現在社会の多様化や青少年の育成等を考えた場合、剣道指導に何を求められているか、また、中学校の部活動はいかにあるべきか等を問いかけながら、日々の活動に取り組むことも大切であると考える。

最後になりましたが、日々の先生方のご苦労やご指導に感謝しながら中学校部からの報告と致します。

## 居合道部

高橋憲司

毎年県剣道連盟が主催している春、秋の講習会を、今年は当県において国体が開催された関係から会場を石井町勤労者体育センターに移し、春は講師に高知の澤田範士をお迎えして四月四日に開講し二十名の受講者がありました。秋は大阪の福田範士をお迎えして十一月六日～七日の両日開講し少年剣士十七名を含めて六十二名の受講者がありました。また、部として講習会の前日に範士を囲んでの夕食会を設け、併せて会員相互の親睦を図った。九月五日～六日には勝浦市において居合道中央講習会があり平尾、原田両受講生が派遣せられ、その伝達講習会を十月十七日徳島市農村環境改善センターにおいて実施し、二十五名の参加がありました。大会への参加は第二十八回全日本居合道大会が福岡市において開催され五段に斉藤、六段に吉岡、七段に前田の各選手が本県代表として参加し、五段は一回戦で敗退しましたが六段は二回戦に進出し七段は緒戦を突破しました。審査会は五月二十日、十一月七日及び二月二十日に級～五段の審査を実施し、各々二十名、三十名及び十二名が合格しています。

中央審査会においては、岸田光博氏が六月二十八日福岡市において六段に昇段されています。

部の行事としては、四月二十五日石井町勤労者体育センターにおいて県下居合道大会を開催し五十五名の参加があり香川大会及び全日本大会の選手選考を行い、また優秀選手の表彰も行いました。大会参加は七月四日に大分市民体育館において開催された第十回大分居合道大会に参加をして二回戦まで進出しました。続いて七月十二日高松市で開催された第二十二回香川居合道大会に参加しましたが、四段が二回戦に進出したのを除いて初段～六段の各段で緒戦を突破できず、成績は振るわず強化練習会は各大会を前に実施したが回数、内容共に足らない点を反省して次年度の強化方法の課題としました。

一方で、今年度各地区で指導に当たっておられる先生方の努力によって居合道に親しむ会員が増えつつあり明るい材料となっています。

## 女子部

徳島市立高等学校教諭　手塚　十三子

第四十八回国民体育大会剣道競技は、十月二十五日から二十八日までの四日間、小松島市と徳島市の二市を会場として熱戦が繰り広げられ、見事総合優勝を飾りました。

小松島市では少年の部が行われ、本県代表の富岡東高校（猪尾満紀選手・陶木りえ選手・楠幸代選手・酒巻裕美選手・大城夏子選手）は、地元の大きな期待を担い大健闘して、堂々五位の入賞を果たしました。監督の河田清実先生の指導の下、選手の皆さんは強化に継ぐ強化で片時の休む間もなく本当に厳しく、辛く、長い道のりであったことでしょう。また勉学と剣道の両立に、口では言い表せないほどの努力を重ねられたことと思います。平成五年

度は県下を挙げて国体一色に彩られ、充実の年であったと言えるでしょう。

しかしながら、国体総合優勝というすばらしい成績の一方で、剣道離れという問題がさらに深刻化しています。全国中学生の平成四・五年度比では、一万一千人余りが減少、本県も同比でみますと全体では女子がわずか二十二人増で到底増加と言える数字ではありません。

さらに高校においては一層拍車がかかり、去る一月開催された大会では、参加校がわずか十校という厳しい現実を目のあたりにして言い知れぬ寂しさや不安を覚えたことは否めない思いですが、今こそ剣の理念に立ち返り真の剣道を学ぶ時期ではないかと実感いたしました。

国体大成功を機に、女性剣士の皆さんのさらなる剣道に対する御理解と、今後ますますの御活躍をお祈りいたします。

# 国体剣道成年二部優勝

二部大将　那倉文夫

平成五年十月徳島市において第四八回国体（東四国国体）「剣道競技成年の部」が開催され本県が「成年二部優勝」「剣道競技別総合優勝」という永年にわたる「夢」を実現させることができました。

振り返れば毎週火木土の強化練習、茨城県「鹿島神武殿」で警視庁の猛者との「荒稽古」で心身共に鍛えあげられたこと、そして県外遠征での武者修行等々が積み重なって今回の栄冠に結びついたと思います。

成年二部は先鋒玉田、中堅鈴木、大将那倉の年齢、職場の異なった三名で編成され全国の強豪と対戦することとなりました。

大会が近づくにつれ「優勝するんだ。優勝出来るのだろうか。」という気持ちが心の中で微妙に揺れ動いていました。

大会当日の天気は「快晴」。心の迷いはすでに無く、あるのは「全力で戦うぞ！」という強い意気込みだけでした。

第一回戦は「広島県」との対戦。先鋒玉田選手激しい技の応酬の末「引き面」と懐に鋭く飛び込んで一小手一の二本勝ちを収め幸先の良いスタートを飾り、続く中堅鈴木選手よく健闘するも決定打がでず惜敗し、大将決戦となりました。大将那倉、絶対に勝たねばと意気込むも攻めあぐね、終盤になってやっと本来の「面」が決まり一本勝ちし、結局二対一の対戦成績で辛くも逃げ切りました。

初戦を無事乗り切りホッとしたというのが偽らない心境でした。

続く第二回戦は山形県を倒し波に乗る「新潟県」と対戦。先鋒玉田選手、接戦の末延長戦にもつれ込むが激しい動きで攻め続け、「引き面」を炸裂させて一本勝ち。続く中堅鈴木選手一本先取されるも気落ちすることなく素晴らしい大技・小技で「面」と「小手」の二本を取り逆転勝ちを収める。大将那倉は相手が「面」にきたのを「小手」を取って一本勝ち。対戦成績三対〇で勝利を収めることができました。

大会二日目も「快晴」。泣くも笑うも今日の出来次第、苦労を無駄には

しない！」と気を引きしめ会場に向かいました。

準決勝戦の相手は佐賀県、埼玉県を連破してきた「兵庫県」との対戦。先鋒玉田選手たがいに一歩もゆずらず延長戦となるが絶妙な剣さばきによる痛烈な「小手」を取り一本勝ち。中堅鈴木選手どっしりと落ち着いた試合運びで「面」二本を見事に連取、先鋒、中堅二人の活躍により決勝戦進出が決定する。大将那倉激しく攻めるも一本とならず「引き分け」に終わる。この結果「二対〇一引き分け」で念願の決勝戦進出となりました。

いよいよ決勝戦、実力ナンバーワンの「東京都」との対戦となる。

「最後の戦いだ、頑張ろう！」と気合を入れ試合に臨みました。

ここまで連戦連勝で絶好調の先鋒玉田選手一本を先取されるが我慢強く攻め起死回生の「引き面」を決め延長戦となる。延長戦では「引き胴」を決め貴重な一勝をあげる。続く中堅鈴木選手「優勝は俺が決める」といった激しい攻めを展開、得意の連続技で鮮やかな「面」を決めて一本勝ち、この瞬間「初優勝」が決定しました。会場全体からわきあがる「どよめき」「温かい拍手」は今までの苦労を吹き飛ばすもので、言葉では言い尽くしがたい程の感激でした。

大将戦では二人の活躍に負けじと那倉頑張り、「突き」にきたのを、すかさず「面」を決めて一本勝ちし、対戦成績「三対〇」で「完全優勝」を果たしました。

これもひとえに徳島県剣道連盟会長、連盟の先生方、徳島県警察職員の皆様、国体関係者及び各職場での積極的なご支援や温かい声援があったからこそと深く感謝いたしております。

本当にありがとうございました。

# 国体少年男子

## ――国体に参加して――

## 剣ひとすじに

小松島高校　松村芳紀

小学四年の頃、国体が徳島で開催されること、そして、私がちょうど高校三年の時に少年の部剣道競技に出場することが可能だということを知りました。その時、私は是非とも徳島県代表として国体に出場したいと強く思いました。それが剣道一筋に精進を始めたきっかけでした。

中学に入ってから正式に国体の強化合宿や強化遠征などに参加することになりました。強化合宿では試合を主とする訳ですが、その成績結果が強化遠征の県選抜メンバーの参考にされるということなので、合宿では必死になって頑張りました。県外遠征では兵庫県、広島県、九州各県の強豪チームと剣を交え何度も練習試合をこなしました。しかし、チーム成績は良くありません。五回やって、やっと一回勝つという程度でした。

高校に入学し強化練習も以前に増して厳しくなりました。休日は合宿遠征と休む暇もなくハードスケジュールの毎日でした。くじけそうになる時もありましたが、県代表選手として「ひのき舞台」に立つことを夢みて頑張りました。クラスメートとも遊びたいといった気持ちもありましたが、国体出場という自分の夢実現を思うと、今は我慢し頑張らなくてはなりませんでした。

私がやっと国体の五人のメンバーに決まったのが夏休みでした。決定時は、今までの努力が一つ実ったと大きな喜びがこみあげてきました。しかし、次には徳島県を背負って国体上位入賞を果たすため頑張らなくてはならないという使命感が、自分にとって非常に大きなプレッシャーとなりました。国体本番が近づくにつれ緊張が一層高まりました。しかし、自分が今までやってきた練習を思い起こし、「どんなつらいことにも耐えて来たんだ。やるだけのことはやった。」と思うと、その緊張も自信につながり〝絶対に勝ってみせるぞ〟と自然に力が湧いてきました。本番一週間前の会場練習では、チーム全体のムードも良く技も体調も順調に仕上がっていきました。

一回戦は不戦勝で二回戦は石川県と決まりいよいよ国体当日、待ちに待った日が来ました。石川は遠征で一回剣を交えているチームで相手の剣風も大体わかっていました。試合は接戦になりましたが大将戦の末、私が勝ちなんとかチームが勝つことができました。大将戦は非常に緊張します。遠征での大将戦で私が負けチームが負けてしまうというケースが頭をよぎったりもしました。しかし、遠征で迷惑をかけたぶん本番では、「絶対に負けられない」と、必死に頑張りました。二回戦福岡県、準決勝鹿児島県と九州の強豪が続きました。その二試合とも大将戦を制し、決勝に進むことが出来ました。決勝は佐賀県またも九州勢です。試合結果は三―二の大将戦で最後に私は負けてしまったのですが、ここまで大将の役目を果たすことが出来ました。その嬉しさと決勝戦で負けた悔しさが混在し複雑な心境でした。

特に応援席からの最後の声援には本当に涙が出ました。心にしみるほど温かく嬉しかった。私がここまでやってこられたのは監督・コーチ・剣道連盟の先生方をはじめ応援してくださった徳島県民の皆様のおかげだと思います。この国体は私の人生において、何ものにもかえがたい大きな勉強をすることができました。これから、社会に生きていく時、国体を通して経験したことを大いに生かし日々精進していきたいと思います。応援してくださったすべての方々、本当にありがとうございました。

## 第四十八回国民体育大会に出場して

城ノ内高校　泉　秀俊

僕にとって第四十八回国民体育大会に選手として出場できたこと、またその大会において準優勝できたことは、今までの人生で最高の思い出になりました。これもまたいろいろな方々の応援があってここまでできたことを感謝しています。

僕の記憶では、小学三年生の頃から国体の強化錬成会があったことを憶えています。その頃は国体というものがどんなに大変なものであるか全く知りませんでした。

小、中、高校と時が過ぎるにつれ、国体選手になりたいという意識がだんだんと高まり、「選手にはいれたらいいなあ」と、思っていたことが現実になった時、僕はとてもうれしく思いました。しかし、逆にみんなの期待にこたえることができるだろうかという不安もありました。

国体まであと一年になった時、いろいろな所に遠征しました。はじめのうちはとても歯が立ちませんでした。いくら試合をしてもまったく勝てず、「これで大丈夫なのだろうか！　僕ではだめなんじゃないだろうか！」という想いで、僕がおちこんでいた時、西谷先生、福多先生のいろいろなアドバイスがあり何度も立ち直らせていただきました。

国体一週間前になると合宿に入りました。この時が一番精神的、肉体的にもきつかった時期でありました。この合宿中に国体の会場で練習をした時、観客席は人で一杯でした。その会場で僕が試合をする場面を想像し、自分の今までの最高の力を充分に発揮しようと、練習にも力がはいりました。

国体当日、自分のために応援してくれている方々の期待にこたえることができるように頑張りました。初回の石川戦は、体がかちかちでおもい通りの試合ができませんでした。一勝一敗、僕のところで、勝負がかかっている、〝絶対に勝つのだ！〟という気持ちで試合に臨みました。勝てた時、大将戦につなげることができうれしかった。大将戦をものにした時、勝てたうれしさが実感としてわいてきました。

試合二日目になると、今日で何もかもが終わってしまう、自分の持てる力を充分に発揮しようと気合がはいっていました。三回戦四回戦に勝ち、決勝進出ができたことは本当にうれしかった。

本当に今まで剣道をしてきてよかったと実感いたしました。これからもこれ以上の成績をあげられるよう頑張っていきたいと思います。

小松島高校　川添義仁

私の人生にはたくさんの目標がある。成績の向上、大学進学など、一日一日が目標に向かった生活である。その目標の一つに東四国国体出場があった。

東四国国体のことを知ったのは小学生の高学年になってからであった。自分の所属する少年剣道教室には強化候補選手が三、四人選ばれていた。私はその中には入っておらず、憧れの眼差しで見ていた。中学生になり国体強化の合宿や遠征などで自分も参加するチャンスが増えて参加しているうちに、いつの間にか国体に出場して戦ってみたいと思うようになった。小松島高校に進学した。同校は国体強化校である。三年後に開かれる本大会へ向け日々練習に励んだ。

そして、本大会を迎えることになる。試合会場には徳島県チームを応援してくれる人でいっぱいになっている。私はあがってしまい、気持ちを落ちつけることができなかった。しかし、チームは準優勝というすばらしい結果を残すことができた。今、この大会を振り返ってみると、私にとって本当に有意義な大会であった。この大会での悔しさを乗り越え、これをバネにして成長する精神力を身に付けていこうと思う。私はまだ若い。これから自分にどんな力があるのか、未知なる希望と反面、一抹の不安を抱いている。しかし、剣道という道を歩んでいく以上、これから自分が心から満足できる結果が残せるよう常に心に訴えながら一生懸命生きていきたいと私は考えています。

最後になりましたが、諸先生方、友人、応援してくださった皆様方、本当に有難うございました。今後とも御指導の程よろしくお願いいたします。

城ノ内高校　近藤　正章

半世紀に一度の地元開催で行われる国民体育大会に本県代表選手として出場できたことは大変名誉なことであり、僕にとって人生初の大仕事だった。

高校に入学して国体遠征に参加させてもらい、そこで僕が見たものは県外のレベルの高さと剣道という格闘技の真の厳しさだった。「このままでは、いい結果が出せない。人一倍稽古しなくては。」そんな思いで本番までの期間はとにかく我武者羅に稽古をした。なんとか強くなりたかった。友達が遊んでいる時も、テスト勉強をしている時も、テレビを見ている時も、僕達国体チーム六人は稽古をした。

「本番まであと〇〇日」と書かれた新聞を見ると体に震えを覚えたのを忘れられない。町に立ててある、すだち君や国体の旗を見かけるとその場を逃げ出したくなる程のプレッシャーを感じたこともあった。

気が付けば国体まであと一週間と迫っていた。その一週間は最後の調整合宿をした。この合宿では試合会場で稽古をした。試合のコートが会場の中央に二つ、他は先生方の席と応援席だった。「この席が地元の人達で埋まるのか。」と思うと、稽古にも緊張感が漂わないはずがなかった。宿舎に帰ってもその緊張感が続き日を増すごとに口数も次第に減っていった。

国体本番、想像を絶する緊張感と地元の人達の大声援の中、僕達は持てる限りの力を試合に出し切った。初戦から大将戦になるなど大苦戦をしながらも福岡、鹿児島など強豪の九州勢を大将戦で破り決勝戦にコマを進めた。決勝の相手はやはり九州の佐賀県だった。先鋒が勝ち、次鋒の僕もなんとか勝って、僕達はリーチをかけた。しかし、勝負の世界というものは、そう甘くはなかった。中堅、副将と倒されついに決勝まで大将戦となった。しかし、もう勝負の流れは変わっており、もうあと一歩のところでの優勝を逃がしてしまった。

あっと言うまに時間がたち、僕の人生初の大仕事は準優勝という結果を残し幕を閉じた。

僕は、この貴重な体験を全ての面でお世話になった監督、コーチの先生方の御恩を、そして裏方で支えてくださった役員の方々の熱い声援を忘れることなく、今回達成できなかった「日本一」の夢にむかって、より一層剣道に精進しようと思う。

## 国体に参加して

城ノ内高校　佐藤　浩

第四十八回国民体育大会に出場することが「私の夢」であり「目標」でもありました。私にとってこの国民体育大会は本当に心に残る大会でした。

私は小学校から剣道を始め今年で八年、八年間ずっと続けてきました。最

近、剣道というと野球、サッカーに比べると人気のないスポーツですが、礼儀の面、集中力の面などで他のスポーツにないよさがあると思います。

だから今まで続けてきて後悔していません。むしろ剣道をする機会を与えてくれた父母とここまで御指導してくださった先生方に感謝しています。

剣道人生の中でも一番印象に残っているのは、やはり高校時代のときです。朝七時すぎからの早朝練習、そして午後の練習、長期休日には県外遠征というハードな高校生活を送りました。そして、その成果が実り二年連続インターハイに出場することができました。

しかしインターハイでの試合内容はというと自分本来の「攻め」の剣道ができずに悔しい思いをしました。そして、そんな自分が情けなく非力に思えました。

だが、そんなに深く考え込んでいる暇もなく新たな挑戦〝国体優勝〟という大きな目標に向かって走り始めました。国体本番まで数多くの合宿や遠征を繰り返し「心・技・体」の充実を目指しました。その中で精神的な面でも気持ちの余裕が出てきだし早く勝負してみたいと思えるようになりました。

試合当日は、どの試合においても大将戦となり緊張の連続でした。苦戦ながら一戦一戦勝ち進むことができ、決勝では惜しくも〔3―2〕で負けてしまった。「優勝」という目標は達成できなかったが全国第二位と大健闘を果たすことができた。

ここまでこれたのは自分一人だけの力だけでなく監督、コーチの先生方をはじめ、私をずっと応援してくださった周りの人々のおかげです。本当に感謝しています。この大会は私にとって人生の上で大きな一ページとなりました。この経験を生かし大学へ進学しても引き続き剣道競技と厳しく付き合っていこうと思います。そして今度こそは全国第一位になろうと思います。

# 国体を終えて

福住成樹

小学校の時、何げなく始めた剣道が自分にとって、国体というこんなに大きな舞台にまで立つことが出来るとは予想もしていませんでした。

小学生時代、最初は試合に出ても一回戦で負け弁当も食べずに持ち帰るといったふうで、その時はまた負けても「悔しい」と思う気持ちはありませんでした。しかし、だんだんと試合回数をこなすうちに涙が出るようになってきました。悔し涙です。

中学に入ってからは練習も国体に向けて一層厳しくなり、毎日毎日が充実した日々でした。休日などは県外にも遠征に行き全国の選手達と剣を交えました。

高校へ進学した時、大きな変化がおこりました。それは福多先生との出会いです。そして、私の構えを以前の中段の構えから上段の構えに変えたのです。上段の構えは初心者なので試合に出てもはじめは負けてばかりでした。何度もくじけ「剣道をもうやめたい」と思ったこともありましたが、剣道部員の励ましや自分の国体に出場したいという夢にささえられ頑張ることが出来ました。

国体を終えたいま、私の人生にとって大変おおきな勉強をさせていただきました。これから社会に出ても、この経験を生かし頑張っていきたいと思います。

# 国体少年女子

## 国体の思い出

富岡東高校三年　楠　幸代

明日はいよいよ本番だ。10月24日の夜、チームの皆と竹刀の最終チェックをしながら、「いよいよ明日だ」というのと「とうとうこの日が来てしまった」という気持ちでとても複雑な心境でした。

思えば2年前、この富岡東高校に入学したときから東四国国体に向けての県外遠征を数えきれない程やってきました。負けては河田先生に厳しく指導され、もうやめたいと何度泣いたことか分かりませんでした。しかし阿蘇へ行った時にはわざわざ寮の部屋をかして頂き会場までバスでの送り迎えや温泉や食事に連れて行って頂いたり、群馬県へ行った時には毎日試合ばかりでは疲れがたまると休養日を作って軽井沢まで連れて行ってくれたり、先生や御父兄の方々の心づかいを身にしみて感じることができとてもうれしく思いました。

私達はちょうど地元国体開催県の選手に幸いにも選ばれたおかげで全国各地へ遠征することができ、いろんな先生や選手達と出会い、学校では学べないいろんな事を多く学ぶことができました。

試合にはチーム全員ベストな状態で挑んだのですが結果として5位にとどまりました。

目標だった決勝進出ができずくやし涙を流しましたが今まで何度やっても勝てなかった阿蘇に国体前の最後の練習試合で勝つことができました。それまで本当に苦しかった分、阿蘇と互角に戦える様にまでなったことを誇りに思い、また強化遠征などで培った気力、体力をもとに卒業後もこれを生かして社会へ出ていき、いろんな壁にぶつかった時、国体強化の苦しい中で学んだことを思い出し強くのり越えていきたいと思います。

強化遠征へ行った先でお世話になった先生、民泊で家族の様に接してくれた方々、厳しくそして楽しくご指導下さった河田先生、本田先生に心から感謝しています。

## 国体の強化に参加して

富岡東高校三年　笠松寛子

私は国体当日、試合をすることはなかった。つまり、かたちとしての結果は残っていない。選手ではない私が国体までけいこを続けることには、「骨折り損のくたびれもうけ」との、反対の声も少なくはなかった。自分自身、たとえ選手が優勝しても、本当に私自身の苦労がむくわれ、努力が花開いたことにはならないことも分かっていた。しかし、得たものは選手と寸分の変わりもないと思っている。

私も、そして選手も、日々の厳しいけいこの中に剣道の技術の向上だけを見てきた訳ではない。辛くなかったと言えば嘘になる毎日のけいこで、つきなみな言葉ですが、本当にかけがえのないものを得ました。

国体で上位を目指す以上、技術の向上は極めて重要なことであった。けれど、私たちがけいこから得た技術以外のものも実に大切である。果たしてどちらがけいこの副産物であったかは決めかねる。ただひとつ言えることは、岡目八目（当事者より傍で見ている者の方が、かえってことの真意がよく分かる）という言葉があるように私は選手ではなく、その傍に居た者として、選手以上にけいこから私たちが得ているものをよく理解していたと思う。だからこそ、今国体を終えて心から国体にたずさわる一員であって良かったと思っている。私は国体までの数々のことを思い出にする気はない。むしろ、これらの経験と共にこれからも先へ歩んでいくつもりだ。

# 国体剣道大会の民泊を引きうけて

直心館長　田村直一

平成五年十月二十三日全国から精鋭の国体選手少年剣士が続々と小松島市の会場に詰めかけてきた。

若い力と感激に
燃える若人胸を張れ
歓喜あふれるユニフォーム
肩にひとひら花が散る
花も輝け希望にみちて
競え青春強き者

右は大会歌『若い力』の一節である。

直心館に民泊されたのは、宮沢保行宮城県剣道部監督、小牛田農高鈴木事務長、小牛田農校二年千葉康弘、同二年伊藤進、同二年中村益夫、仙台東高校二年鈴木宏明、東隆高校二年三浦昇各選手の七人。宮沢監督は小牛田農林高校の教諭で国士館大学の御出身であられ、故下村富夫先生を初め徳島県内の剣道同学の諸先生方もよくご存知であられ、宿泊初日から旧知のように話がはずんだ次第である（鳴子コケシを土産にもらった）。

直心館世話人の嶽善雄、佐野善作、湯浅久代氏等が十月二十三日徳島港に一行を出迎え車で眉山を初め市内各地を観光した。

夜は近所の隣組代表鈴江一美氏等大勢の方々による歓迎パーティーを催し、少年達の阿波踊りの披露もあって楽しい思い出の団欒がつづいたのでした。

宮城県選手一同と直心館世話人一同

十月二十四日の夕刻（一七・三〇―一九・〇〇）、宮沢先生のご指導を頂き直心館員一同との交流剣道研修会も有意義に終了することができ、いまもあの時の切磋琢磨の一ときを忘れることがないのである。

十月二十五日いよいよの第一回戦は、強豪チーム新潟県と対戦、勇躍第二回戦に進み、試合上手といわれる東京都選手団との試合となる。

剣道試合のかくあり、あくかるべき姿とは！　正々堂々の戦法とは！

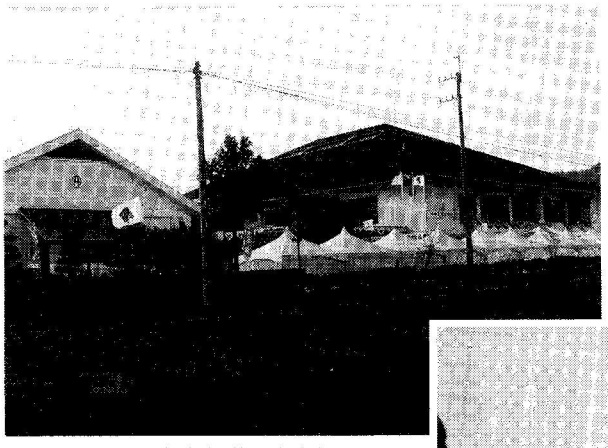
とにもかくにも時は過ぎ、大将戦でいよいよ雌雄を決する場面となる。延長も既に三回、深沈たる場面もあったが接戦奮闘。遂に東京に宮城は降った。「惜しい戦い、実のある戦いであったが。「来年は敗けない」……監督の言である。

〝八年前〟小松島市に於て国体剣道大会を……との念願の下に私は同志と謀り議員として議会決議に力を結集した。つづいて理事者にも武道館の早期建設を陳情、県連の堀江会長初め諸先生の絶大なるご支援と地元小松島市内の各関係者のご協力をいただいてここに、第四十八回国体剣道大会を成功させることができ、立派な成績で歴史を飾ることができたことを皆様と共に無上の喜びとしたいものである。

民泊をされた生徒達から正月に手紙が届いた。平成六年度の全国大会にも出場をする。今夏阿波路の旅に来るということである。

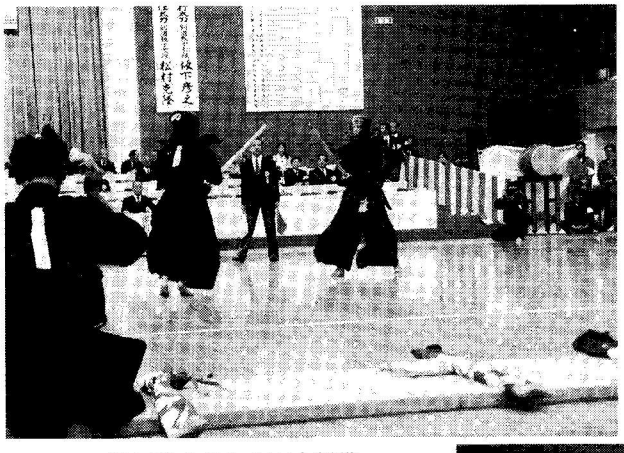
〝友有り遠方より来ると〟

宮沢先生を囲んでの県道錬成会（10・24）



小松島市剣道大会会場

御熱心に観戦される紀宮様



延長をくりかえす大将戦

地元小学生によるマスゲーム

# インターハイに出場して

城ノ内高校剣道部主将　有松伸也

僕の高校生活最後の夏。八月、僕たち城ノ内高校剣道部は全国高等学校総合体育大会への出場権を握り、栃木へ向かった。昨年に引き続いての出場。県総体二連覇は城ノ内高校剣道部創部初の快挙。決勝トーナメント進出を目指し予選リーグに臨んだ。

第一試合目から強豪相手。全国でも名高い鹿児島県代表鹿児島実業高校。メンバー全員で戦ったけれど結果は「3－1」で敗れた。強豪相手、今年こそ決勝トーナメント出場、というプレッシャーが肩の重荷になり、自分たちの本来の力を発揮できなかった。二試合目は大阪代表上宮高校。全国を舞台にしての最後の試合。悔いのない試合をしたい、と試合に臨んだ。「2　2」で引き分け。しかし全員一試合目よりは自分の剣道ができた。メンバー全員の顔に満足感が満ちあふれていた。

僕の夏は終わった。結局全国の大舞台で大きく舞うことはできなかった。しかしこの試合で僕はたくさんのものを得ることができた。決して技術の面だけではなく……。この体験は僕の人生の中で大きく役立ってくれるであろう。出場できて本当によかった。

僕たちを指導して下さった監督の先生、アドバイスをして下さった先輩方、そして陰でいつも僕たちを温かく見守り、支えて下さった父兄の方々に感謝します。そして最後に、城ノ内高校剣道部の一員であったことを誇りに思い、これから先何事にもがんばっていきたいと思います。

# インターハイベスト8に進出して

富岡東高校三年　大城夏子

「ある一定のところまでは誰でも登ることができるが、そこからのあとちょっとというのが難しいんだ。」

そう言ってその、あとちょっとの部分を先生は熱心に指導してくださった。それがやっとこのインターハイで生かされたようだ。

最後のインターハイ。玉竜旗で期待を裏切ってしまったこともあり、あっさりと負けることは絶対に許されないと思った。それが気力にもなり、またちょっとしたプレッシャーにもなった。みんなそれぞれ不安を抱えているにちがいない。どうにかして盛り上げて良い思い出を残すために悔いのない試合をするぞ！　そのためには今まで迷惑をかけてきたぶん、私がまとめていこう。そう心に誓って試合に臨んだ。

予選リーグ一回戦橘高校と対戦し5－0と圧勝したが緊張していたせいか一人ひとりおもいきりが足りなかったような感じだった。二回戦の久御山高校とはこれまでに何十回と試合形式の練習をしていることもありお互いに技を知り尽くしていた。気を抜いた方が負けである。

「相手が打ってくるのを待つな、そのもう一つ上の気迫で攻めよう。」

全力で攻め勝ちチーム全体が波に乗ってきたようだ。

決勝トーナメント一回戦は高千穂だった。もう一息、がんばろう。すべての力をふりしぼった。しかし、まだ充分に相手を攻め崩せていないままに、あわてて飛び出していくという形になり高千穂独特の試合運びのうまさでどんどん崩されていった。中堅で盛り返したが、もう後がない。いろんな考えが頭の中を駆けめぐっていたが土壇場で副将が自力を発揮し、2－2で私に持ってきてくれたとき、不思議なことに迷いや不安はどこかへ行ってしまった。私の気持ちは、「どうしたら……」から「まかせなさい」に変わった。中盤におしい引き胴があり、それからは自分のペースで試合することができ

た。有効打となった一本はほとんど気迫で取ったように思う。無意識のうちに打っていた。大逆転で勝ち、感激の一勝だった。しかし、次の準々決勝で、私たちは西大寺に叩きのめされ、とうとう最後まで勝つことができなかった。精神面の鍛え方のちがいが原因だった。私たちにはないものが西大寺の雰囲気の中にはあったように思う。敵の気迫を学ぶことができた。

国体を目前に控え、私たちはやや焦りぎみだった。体力的にも精神的にも少し弱っていたと思う。最悪の状態に近いときでもあった。しかし何度も励まし最後まで戦い抜く力をくださったのは河田先生だった。私たちの周りにはいつも応援してくださる温かい人たちがたくさんいる。苦しい苦しいと言っては自分だけが頑張っているような気でいたときもあったが、この周囲の人たちなしではやはりここまでくることはできなかったと思う。きっとこれからも応援し続けてくれるだろう。そんな期待にこたえられるように富岡東で学んだことを生かして、自分自身のために大学でもしっかり頑張るつもりです。

## 全国高等学校剣道選抜大会三位入賞して

富岡東高校二年　酒巻裕美

第一回全国高等学校剣道選抜大会は、私たちが新チームを組んで初めての全国大会ということでした。第一回大会には県予選で敗れ出場権を逃し、今年こそはという思いがあったことや、10月に行われる国体に向けて、自分たちの実力を試す重要な試合となりました。

予選リーグは鳥取県の米子商業、神奈川県の東海大相模とでした。2戦とも緊張もあったせいか、自分たちの実力が半分も発揮できず、監督の厳しい指導も受け勝ちはしたものの快勝とはいえませんでした。

決勝トーナメント一回戦は、第一回大会の覇者でありインターハイ、国体と優勝している山形県の左沢高校とでした。予選リーグのような調子で臨んで相手にしてくれるようなチームではないので5人で一本を取るという気持ちで試合に挑みました。正直なところ勝てるとは思ってもいなかったので、勝負がついた時には、今までに味わったことのない喜びを味わうことができました。準々決勝での愛知県の星城戦も結果ほど楽な試合ではありませんでしたが、勝つことができました。準決勝は、鹿児島県の神村学園でした。神村学園には挑戦者のつもりで胸を借りるつもりで思いきって挑みましたが、精神的にも技術的にもやはり一枚上手でもう一歩及びませんでした。

しかし、この大会で三位に入賞できたということは、国体に向けての飛躍となり、また厳しい練習の成果が出たという大きな自信になりました。

## 四国大会に出場して

富岡東高校二年　猪尾満紀

四国総合体育大会が愛媛県で開催されました。

今年は徳島県で国体が開催されるため、どこのチームにも負けないぐらい練習をしてきました。予選リーグは明徳義塾と高松北と南宇和と富岡東の4校リーグで行われ、みんなで一丸となり挑戦者となって相手と剣を交えました。さすがにどのチームもいい試合をしていましたが、私達は今まで練習してきたことを十分発揮して、一人がみんなのために戦うことができたので予選リーグを突破することができました。準決勝に入って、高松商業とでしたが攻め勝ち、打ち勝って富東のムードを作っていくことができ終わってみれば3－1で勝っていました。

決勝へ駒を進めた私達は、高知商業と対戦することになりました。決勝戦になると周りの雰囲気がなんとなくちがって見え、ここまできたんだから優勝したい、そんな思いがふと頭の中をよぎっていきました。こんな考えは早くなくさなくてはいけない。自分の持っている力を全部出しきるんだ、と何度も何度も自分に言い聞かせて試合に挑みました。本当に苦しい試合になりましたが接戦の末惜しくも敗れてしまいました。

頭の中がまっ白になり、悔しくて悔しくて涙が止まりませんでした。先輩があんなに一生懸命頑張ってくれたのに。私の精神的な弱さ、甘さ、技術のなさが腹立たしく思われました。でも終わってしまったことをどんなに悔やんでも結果は変わりません。また新たな目標を持ち、自分を鍛えなおして、もう一度挑戦したいと思います。

# 第23回中学校選抜剣道全国大会に出場して

市場中学校剣道部主将　近藤正和

8月23日、24日と京都府立体育館で第23回全国中学校選抜剣道大会が行われました。

ぼくたちは22日の朝練習会場である大将軍小学校に練習をしに行きました。一～二時間ほど練習してとなりにある試合会場の京都府立体育館へ行きました。体育館の中へ入ると何人かの人がきていました。ぼくたちは歩いていろいろ体育館の中を見学しました。そして、体育館の外に出た時、ぼくは去年予選で負けたので、今年は予選を突破して決勝リーグに進出するために絶対に頑張ろうと思いながらバスに乗り旅館に帰りました。その夜、ぼくたちは「あしたは必ず予選を突破しような。」と、試合のことを言いながら明日の試合にむけて早くねました。

23日試合の日、ぼくたちは気合をいれて旅館を出発しました。体育館に着いて中に入りますと何か緊張感がつたわってきました。

開会式が始まりました。開会式が終わり、試合に近づくにつれて緊張してきました。個人戦が始まりました。ぼくは緊張していたので自分でおちつかせて試合にのぞみました。一回戦は一本勝ちで勝ちました。しかし、二回戦で下館の池田選手に負けてしまいました。でも気をとり直して団体戦にのぞみました。一試合目南中学校でした。ぼくたちは、その中学校をしりませんでした。だからどのくらい強いのかもわかりませんでした。でも、気合をいれていきました。しかし、結果は負けてしまいました。ぼくたちは、おちこんでいました。しかし、次の清風戦で「絶対に勝とうな。さっき負けたけど、この試合勝ったら決勝リーグに残れるかもしれんけん絶対この試合に全力でかかっていこうな。」と、言いあいました。清風戦がきて、みんな気合十分でした。でも負け、ぼくたちの夏は終わりました。しかし、全国大会に出場できてとてもうれしかったです。

いままで苦しい練習をして全国大会に出場でき、いろいろなことを学びました。全国にいけたことなど、いろいろな試合で優勝できたことなど、佐藤先生、先輩方のおかげだと思います。全国に出場して学んだことをこれからの剣道人生に生かして頑張りたいです。

# 全国大会に出場して

那賀川中学校　坪井さくら

一昨年の夏、念願の「日本一」を成し遂げ先輩方は卒業しました。そして残ったのは当時二年生だった四人と一年生一人の五人でした。五人の中には初心者や中学生としての試合経験などほとんどない人がいました。前のチームと比べるととても強いとはいえない状態でした。しかし、十二月の若鷲旗、三月の神埼旗、五月の剣龍旗など無我夢中でいつのまにか優勝していました。

八月、自分たちにとっての最後の試合は京都で行われました。今年も多くの先生方や保護者のみなさんが縁の下の力持ちとなって最高のコンディションで試合に臨ましてくれました。今までの成績からしても「二連覇」は不可能なことではありませんでした。できることなら今年もあの喜びを味わいた

い、そう思いながら全国大会は始まりました。

予選リーグ第一試合目は長崎県代表の崎辺中との対戦でした。このチームは、二年だけのチームで今までにも聞いたことがなく全く予想がつきませんでした。勝つには勝ちましたが、みんな自分の試合ができず最悪のスタートでした。第二試合目は福井県代表の足羽第一中とでした。この試合は肩の力みがとれ5－0と快勝しました。一日目最後の試合決勝リーグ一回戦は埼玉県代表の野田中と対戦しました。このチームは今までやってきたチームとは異なるタイプで大苦戦しました。2－2の代表でやっと勝利を手にしました。この一日は大変ながく感じました。

そして、二日目が始まりました。準々決勝は前年度と同じで一番苦戦した、あの熊本県代表京陵中でした。今までに試合、練習試合と何度も対戦しお互いよく知っている者同士の戦いでした。胸をかりるつもりでおもいっきり向かっていきました。先鋒戦共に惜しい技がありましたが一本にならず引き分け。続く次鋒戦は必死にくいついていきましたが二本負けでした。中堅戦は互いにはげしい試合でした。しかし引き分け。そして副将戦となりました。心理的には一番苦しいときです。この試合で勝負が決まるかどうかというところでした。結果、惜しくも一本負けでした。大将戦は一本勝ちでこの試合は終了しました。こうしてわたしたちの最後の試合となりました。

この全国大会を含め数々の遠征練習などはわたしたちにとって苦しいようですばらしい思い出となりました。これも、厳しいけど熱心に指導してくださいましたお一人の顧問の先生や支えていただいた全ての方々のおかげです。今後はこの三年間で学んだことを何事にも生かしていけるようにしたいと思っています。

# 全国スポーツ少年団剣道交流大会に参加して

## 初めての全国大会

北島中学校三年　初段　鈴木　加奈子

平成五年三月二十七日から二十九日、富山県総合体育センターで開催された全国スポーツ少年団剣道交流大会に県を代表して参加させていただくことができました。

初めての全国大会出場で、うれしい反面不安もありましたが、大会前の強化練習で監督の美馬先生や選手の皆んなとけい古を重ねるうちこの不安が楽しみに変わっていきました。それに、この大会は試合をするだけでなく各県の代表選手全員が同じ宿舎で寝起きを共にし交流をはかる目的を持っていることも魅力で、実際とても楽しく有意義なものでした。

大会一日目は大阪府警の石田利也・洋二両先生による基本錬成と合同練習。二日目、三日目に試合が行われました。全国大会ということもあり、各選手の一挙一動がすばらしく、一つ一つが刺激となりました。試合の結果は、私自身は予選リーグで敗退したものの監督、チームメイト、父兄の皆さんの応援に励まされ気おくれすることなく、自分でも不思議なくらい落ち着いて試合に臨むことができ、大きな自信となりました。小学生の団体戦は一試合ごとに調子を上げ、みごと三位となり大健闘でした。

全国大会という大きな機会にめぐまれ貴重な体験ができたこと、美馬先生はじめ多くの出会いが持てたことがうれしく感謝しています。これからも新たな目標を持ち、達成できるよう努力していきたいと思っています。

# 第八回徳島県高齢者剣道大会報告

徳島県高齢剣友会理事長　西野四郎

桜花が正に爛漫と咲き誇る四月十一日（日）九時三十分、東京から松島猛全日本高齢剣友会理事長ほか三名、高知からは土佐生涯剣友会依岡藤善会長ほか九名の先生方をお招きして盛大に開催された。

第七回大会までは九月に挙行していたが、とくしま「あい」ランド推進協議会主催の剣道大会が秋季に行われるため、第八回の本大会以降は四月に開催することとなった。

開会式は国歌斉唱、剣道関係物故者の霊に対し黙禱など型通りの行事で始まり、永年わが高齢剣友会発展の為に大変ご尽力賜った清原栄範士に感謝状の贈呈があり、勝浦守大会々長のあいさつに続き、松島全日本高齢剣友会理事長と県剣道連盟勝沼信彦副会長から有難いご祝辞を頂き演武に移る。

日本剣道形は前年度優勝チーム徳島支部打太刀　糸田川美千男、仕太刀近藤康次両五段の意気の合った素晴らしい形。

居合道英信流平尾勝美八段、野口直之七段の見応えのある太刀捌きが披露された。

試合は団体戦から始まり、個人戦ともども相互に鎬を削る熾烈な剣捌きの連続であった。結果は次の通り。

団体戦優勝阿南支部B（中山啓男・浜田逸郎・株木芳夫）、準優勝小松島支部、三位阿南支部A、徳島支部B。

個人戦　A組（大1・8～10・8生）優勝早川一也、準優勝西野四郎、三位平岡竹雄。B組（大11・1～14・5生）優勝遠藤一美、準優勝西山勝喜、三位阿部三十三、糸谷文雄。C組（大14・7～昭6・1生）優勝中山啓男、準優勝菱田晋、三位勝沼信彦、浜田逸郎。

午前中に県下の試合は全部終了、昼食後一時三十分から東京・高知・徳島の三者交流試合開始。さすがに首都東京の猛者達、剣豪―畠五月雄二刀流、高崎慶男、小田部三郎先生の試合運び、間の取り方、素早い打突の正確さ等々、本当に立派な剣道を学ぶことが出来たように思う。

なお、堀江幸夫、石井克太郎両範士を囲み東京三名、高知十名、徳島二十六名が三十分間の合同練習に思う存分に好汗を流し稽古を楽しみながらお互いに最後の挨拶を交わす姿こそ剣道を愛する剣友の特権のように思えてならない。

末筆ながら、東京・高知の諸先生方が本大会に多数ご参加頂き錦上に花を添えて下さったことに対し厚くお礼申しあげます。

# 第十五回全日本高齢者武道大会に参加して

徳島県高齢剣友会事務局長　株木芳夫

平成五年六月十六日（水）日本武道館において第十五回全日本高齢者武道大会が行われた。

本県からは勝浦守会長以下十六名が参加した。本大会も次第に大きくなって参加者八一七名剣道は五一〇名の参加である。開会式は型通りすすみ剣道、銃剣道、なぎなたの三種目の試合上の注意、印象的なのは体調の悪い人は「勇気をもって試合をしない」ようにして欲しいということばのあったことである。高齢者の大会だけであろう。剣華の大会歌を全員で歌って式は終了である。

昨年の大会では、本県から優勝、準優勝の二名の先生が出られたが、本年は残念ながら入賞者もなく、四回戦までいった者一名、三回戦まで四名、二回戦まで五名という成績で終わった。

日頃の稽古を積み重ね力をつけておく以外に道はない。全会員の積極的な参加と実力養成の努力をつづけていかねばならないと痛感された。

# 第六回全国健康福祉祭
# 京都大会に参加して

徳島県高齢剣友会監督　一　村　喜佐男

十月二日（土）～五日（火）の四日間にわたり、京都府主催京都市外十カ市町それぞれの会場に於て標記大会が華々しく繰り広げられた。

徳島県選手団一行は、一日結団式が終わり必勝を期して三台のバスに分乗十一時に県庁を出発、一行は午後五時半頃無事元気で池田市伏尾温泉に到着、お互いに健闘を誓いながらの夕食会も大変楽しかった。

翌二日の総合開会式は常陸宮様をお迎えし、西京極総合運動公園陸上競技場で開催されましたが天候に恵まれ秋晴れの素晴らしい青空の下盛大に挙行されました。

三日はいよいよ剣道交流試合が京都市武道センターにて開催、予選リーグで徳島県はA組にランクされ大阪市－福島県、徳島県－山梨県の組合せ、先鋒浜田逸郎・次鋒遠藤一美・中堅奈谷文雄・副将勝浦守・大将高橋静夫のオーダーで先ず山梨県と対戦。先鋒・次鋒は熱戦の末胴の一本勝を決め、中堅引分け、副将は小手二本完勝、大将引分け三勝二分けで敗け無しの大健闘振り。福島県を退けた大阪市との決勝リーグ入りをかけての試合は四日九時開始、昨日の余勢をかって強豪の大阪市とは一勝二引分けの互角、堂々たる素晴らしい成績を挙げ、結果はA組総合点で大阪を制し待望の決勝リーグに駒を進めることが出来た。過去五年間では一度も決勝リーグに勝ち進むことがなかっただけに正に意気軒昂、B組勝者埼玉県と準々決勝をかけての試合に臨む。

流石に剣豪揃いの関東勢埼玉県には二分け三敗という惨めな不本意な成績に終わり残念ではあったが、試合巧者な剣捌きにふれ大いに発憤し勉強出来たことに感謝しております。

決勝リーグ戦に進出したことで優秀チームとして賞状とメダルの授与、また三九八名の剣士の中から九十歳代一名、八十歳代五名が高齢者賞を授与され私もその一員に加えて下さって賞状と盾をいただき本当に健康で剣道をしていて良かったと感謝で一杯です。

# 徳島県シルバースポーツ・フェスティバル大会

（事務局記）

平成五年十一月二十一日中央武道館で会員四十六名参加して催された。本年からは他の種目とも同時に開催し、開会式は吉野川運動場で行われ役員四名が参加した。

十時より剣道の開始式。勝浦会長挨拶、石井審判長から試合上の注意あり、つづいて演武にうつる。日本剣道形を打太刀教士七段中山啓男、仕太刀教士六段株木芳夫両先生、居合は英信流教士八段平尾勝美、教士七段野口直之両先生それぞれ格調高い技を披露された。

その後、各支部対抗の団体試合が午前中に行われ、団体優勝戦では阿南支部A対阿南支部Bの対戦となり阿南支部Aが優勝、二位は徳島支部Aと海部支部と決まる。

昼食後個人戦となる。個人戦では本年からABの二部とし、Aは七十歳以上、Bは六十歳から六十九歳までとする。

成績は次の通り

一　団体戦　優　勝　阿南支部A（中山・株木・遠藤）
　　準優勝　阿南支部B（阿部・上井・中西）
　　三　位　徳島支部A（森川・糸田川・西野）
　　三　位　海部支部（　・西山・平岡）

二　個人戦　A組　①早川一也　②蝦名久作　③勝浦　守・高田　亮
　　B組　①株木芳夫　②遠藤一美　③高田　豊・雄西義春

# 全日本居合道大会

監督　平尾勝美

平成五年度第二十八回全日本居合道大会は福岡県剣道連盟主催により福岡市九電記念体育館に於て十月三十一日盛大且つ厳粛に開催されました。

日本一の座をかけた全日本居合道大会は、シーンとした静けさの中に気迫に満ちた選手の激闘が展開され時折聞こえる裂帛の刃音が場内の空気を震わせる正に冷厳そのものの雰囲気の中で行われました。

本県選手の戦績は五段の部斉藤吉明選手は一回戦宮崎の佐藤戦に1－2で惜敗、経験不足を如実に感じる一戦でありました。

六段の部吉岡修一選手は一回戦青森の向谷戦に3－0で快勝、二回戦は強豪大分の石井選手に2－1で勝ち三回戦へ、ベスト8進出をかけたこの試合では新潟の品田選手に1－2で敗れ惜しくも8強入りは果たせませんでした。毎年このあたりまで進出するので吉岡選手の地力とも思えますが、今一つ精度と迫力を修得して上位進出を期して貰いたい。

七段の部前田健志選手は一回戦石川の森川選手を3－0で勝ち好発進をしたものの二回戦に於て宮崎の長田選手に0－3で敗れました。非常に正確な技前を持った前田選手ですが精神面特に気の発揚が将来の課題の様に感じました。

本県選手は皆確かな技を持って居りますが、修業の深さから滲み出る当意即妙の技量と気の働きに十分配慮して精密に仕上げていけば上位進出も可能であると思います。

何れにしても選手の皆さんの懸命の努力に敬意を表しますとともに益々の御精進をお願い申し上げます。本当に御苦労様でした。

# 中倉旗（内閣総理大臣杯）争奪剣道選手権大会に出場して

機動隊　平野誠司

平成五年十二月五日、国立市民総合体育館において第十四回中倉旗（内閣総理大臣杯）争奪剣道選手権大会が盛大に開催された。

この大会は、その年の全日本選手権者をはじめとする警察選手権、教職員大会、実業団大会、学生大会等の各優勝者並びに海外からの招待選手を特別招待選手として迎えさらに都道府県から選ばれた代表選手の総勢一〇五名によって争われるものです。

私は都道府県代表選手として昨年に引き続き二度目の出場であった。国体での名誉挽回とばかり試合に臨む意気込みは満ち溢れんばかりでありました。

第一回戦不戦勝のあと、第二回戦は中央大学代表の伊藤選手、初戦のため手堅く得意技の引き胴でしとめまずは一安心。

続く第三回戦はアメリカからの招待選手であるカーティス・マーステン、外人選手との公式試合は初めてなので少し不安はあったが、中心を攻めて少しフェイント気味に小手を打てばこれが見事に決まり、さらに相手の打ち出しを〝表しのぎ〟ですりあげ、面に乗るとこれも見事に面あり、まさに二振りの勝利であった。

第四回戦は岐阜県代表の木下選手、県警の中心選手であるが、前に何度か対戦したこともあり手のうちはだいたいわかっていたので慎重に出小手に切って一本勝ち。

いよいよ準々決勝、相手は広島代表の棗田（なつめだ）選手である。この選手も県警で現在活躍中であり、お互いによく手を知り尽くしているため慎重を極める試合運びとなるであろうと思われていた。しかし、試合開始まもなくコーナーに追い詰めた後、放った無心の面が見事に決まり、そのまま相手の追撃を振り切って一本勝ち。

そして、ついに準決勝。現在ベスト4、当然ながらいやでも優勝の二文字が脳裏を支配する。その思いを蹴散らしながら目の前の勝負に集中する。相手は東京代表の平尾選手、警視庁の若手のホープで最近注目されている選手である。

試合開始と共に激しい攻めを受け先を取られる。思わず攻め返すも既にこれまでの自分を見失っていた。その心の乱れをついて見事に面にのられる。その日初めて一本を取られ先制される。まだペースは戻らない。少しして鍔ぜりあいになった。よしこれから反撃と思い分かれようとした瞬間、相手はこちらの一瞬のすきを見逃さなかった。見事な引き面をくらってしまった。完敗である。

振り返ってみれば、ここにきてこれだけの強い攻めができるのは、自分を捨て切れたかどうかの差が出てしまったからであり、敗因は最も大事なところで守りに入ってしまったことに尽きるといえよう。

結局、三位入賞となったわけであるが、この入賞を機会にもう一つ上に目標を置き、また地方でやるハンディを少しでも克服できるよう常に中央を見据えた稽古をやっていかなければならないと思う。

最後になりましたが、ご指導いただきました堀江先生をはじめ剣道連盟の先生方に心よりお礼申し上げるとともに、職場の皆様のご支援、ご声援に深く感謝致します。

ありがとうございました。

# 平成五年度各種講習会参加状況（順不同）

**平成五年度居合道春季講習会　中央武道館**

▽八段　平尾勝美
▽七段　小野寺恒義、野口直之、張野久晴、原田勝、高橋憲司、前田健志
▽六段　谷重太郎、吉岡修一、松村宏道、青木茂生
▽五段　坂本憲一、斎藤吉明、鈴江正雄、岡田良人、川西英爾、福井勝
▽四段　一宮和雄、高野康寛、吉田正雄、満寿良史、松田明治、枝沢正己
▽三段　工藤澄
▽二段　新見和彦、四宮博、山本正司、平瀬進也
▽初段　小引健
▽段外　関口公司、西本忠司、森本秀代、木村精伯、西原仁

**平成五年度居合道秋季講習会　石井町勤労者センター**

▽八段　平尾勝美
▽七段　原田勝、野口直之、張野久晴、高橋憲司、小野寺恒義、前田健志
▽六段　吉岡修一、松村宏道、青木茂生、岸田光博
▽五段　鈴江正雄、岡田良人、福井勝、坂本憲一、斎藤吉明、一宮和雄、一村昌和、吉田正雄、伊賀雅人、岡田育章
▽四段　高野康寛、満寿良史、早川幸男、佐原兵子
▽三段　工藤澄、西内ますみ
▽二段　新見和彦、四宮博、山本正司、桒原栄治
▽初段　猪龍生祥、中川芳文、西原仁、小引健
▽段外　関口公司、西本忠司、森本秀代、桑原瑞枝、中村万理子、西條千鶴子、寒川清、仲稔、藤本文義、吉田節雄、川人政利

**平成五年度剣道春季講習会　H5・5・16　鳴門武道館**

▽徳島支部　田村清憲、馬場力、森川澄、稲木紀一、糸田川美千男、桒野佳明、吉本繁治、佐野徳雄、藤本博司　▽鳴門支部　佐藤勇、伊賀上仙市、林清　▽板野東支部　大野義則、吉田節雄、武田修典、岡田良人　▽板野西支部　高田豊、高田亮、金西重記、加集美山岐　▽美馬東支部　久次米繁興　▽三好支部　来代眞治、徳永賢一、久保和雄　▽美馬西支部　近藤俊文　▽麻植支部　森本武夫、服部美代子、松浦武信　▽名西支部　広瀬清　松田みつ子、東広司、加藤泰男　▽勝浦支部　大久保喜正　▽小松島支部　有松京子、中尾青子　▽阿南支部　須藤恭宏、森眞一、加林敏夫　▽丹生谷支部　吉田租、野々宮真佐夫、久保義博、久川英二　▽海部支部　張西政晴、丸岡偉人、西山勝喜、美馬和義、和田拓男

**土用稽古　H5年7月29～31日　中央武道館**

○3日間
堀江幸夫、西野四郎、柏原浩、馬場力、磯部洋一、手塚十三子、佐藤勇、竹内佳代子、来代眞治
○2日間
勝浦守、田村清憲、東内勉、山岸章彦、土川資雄、大野祐吉、前林利雄、藤本雅史、糸谷文雄、手塚英治、坂下彦之
○1日間
忠津和憲、稲木紀一、松村明文、嶋村謙、中西一夫、山田浩司、米倉滋

**寒稽古　H6年1月5日～7日　中央武道館**

○3日間
堀江幸夫、柏原浩、佐藤勇、三木只雄、来代眞治、高下博行、青木博志、平野誠司、吉田茂雄、小坂治、南谷雅彦
○2日間
大澤孝彰、東内勉、藤本辰夫、手塚英治、岡崎明、西野四郎、糸谷文男、武岡美智、蝦名久作、田村直一、松田敏弘、堀金實、遠藤一美、福井軍二、大石正志、吉田租、坂下彦之、松村克隆
○1日間
勝浦守、西野四郎、福島栄治、飯田栄一、東内守、森篤史、前林利雄、藤本雅史、高田豊、金西重記、岡島茂雄、一村喜佐男、西原仁、阿部全司、玉田晋作、臼木崇、阿部三十三、松本英雄、佐々木和人、西山勝喜、近藤直、岩木一功、徳島東工業高校生、城南高校生、徳島市立高校生、徳島農業高校生

# 平成五年度 戦いの跡

## 〔県内〕

◇第18回会長杯争奪高校剣道大会

（4月18日(日)徳農）

【男子】

▽準決勝

小松島 2－0 阿南工

城ノ内 3－2 富岡西

▽三位決定戦

富岡西 4－1 阿南工

▽決勝

城ノ内 2(2)0(0) 小松島

近藤 × 金田

○泉 メ － 川添

佐々木 × 木下

○有松コ － 福住

谷 × 松村

【女子】

▽準決勝

富岡東 5－0 川島

富岡西 3－1 城ノ内

▽決勝

富岡東3(3)－(2)1富岡西

○猪尾コ － 中野

楠 ココ 高原○

○酒巻コ － 高木

笠松 × 横手

○大城コ 大坂

◇第18回山家旗争奪県下剣道大会

（4月25日(日)鷲敷町民体）

〔中学校〕

優勝阿南中学校 二位那賀川中学校

三位市場中学校、鷲敷中学校

〔高校男子〕

優勝小松島高校 二位富岡西高校

三位阿南工業高校、城ノ内高校

〔高校女子〕

優勝富岡東高校 二位富岡西高校

○五人以上勝ち抜き

○七人 元木啓之（文理）、西聡章（城ノ内）、多田元（鳴門工）、伊月修士（脇町）、川添義仁（小松島）、酒巻裕美（富岡東）、笠松寛子（富岡東）

◇第33回徳島県高等学校総合体育大会

（6月5～7日徳農）

第2日目

【男子団体】

▽準決勝 小松島4(4)－(0)0徳東工、川島1(1)－(0)0阿南工、富岡西3(4)－(2)2富岡東、城ノ内4(6)－(0)0鳴門工

【女子団体】

▽準決勝 富岡東5(8)－(0)0脇町、川島5(7)－(1)1徳市立、城ノ内3(4)－(2)1小松島、富岡西4(7)－(0)0鳴門

第3日目

【男子団体】

▽順位 ①城ノ内2勝（勝者10）②富岡西2勝（勝者7） ③小松島2勝（勝者4） ④川島0勝

【男子個人】

▽順位 ①川添（小松島）3勝 ②松村（小松島）2勝 ③金田（小松島）1勝 ④佐藤（城ノ内）0勝

【女子団体】

▽順位 ①富岡東3勝 ②富岡西2勝 ③川島1勝 ④城ノ内0勝

【女子個人】

▽順位 ①大城（富岡東）3勝 ②酒巻（富岡東）2勝 ③猪尾（富岡東）1勝 ④大坂（富岡西）0勝

◇第22回徳島県中学校剣道選手権大会

（6月13日(日)鳴武）

【男子団体】

▽準決勝

市場 3－1 阿南

鷲敷 3－1 那賀川

▽決勝

市場 1－1 鷲敷

瀬尾 メ × ド 近田

上田 メメ 岡田○

近藤 × 日下

西木 × 藤田

○日和田 メメ － 福田

（代表戦）

○日和田 メ － 近田

【女子団体】

▽準決勝

那賀川 4－1 阿波

市場 3－1 阿南

▽決　勝

那　賀　川3(7)　(1)0市　　場

○大　坂　メメ｜　　一　村

小　西　　×　　野　口

賀　川　メ　｜　メ　大　森

○　芝　　メメ　一　妹　尾

○坪　井　ココ　｜　　西　村

二位　酒巻　裕美

三位　猪尾　満紀

◇第14回徳島県女子剣道大会

（6月20日(日)中武）

【団体】

▽順位　①徳島文理大C　②阿南支部　③小松島少年教室

敢闘賞　鳴門教育大A

【個人】

▽初段以下の部　①宇尾知佐子（鳴教大）　②長井（鳴教大）　③吉村（鳴教大）　▽二段の部　①渋谷瑞江（文理大）　②長野（四国大）　③小川（文理大）　▽三段以上の部　①木下文江（文理大）　②山崎（文理大）　③手塚（徳島支部）

敢闘賞　谷口、服部、市

◇第32回全日本女子剣道選手権大会県予選

（7月10日(土)県警体）

一位　大城　夏子

二位　酒巻　裕美

三位　猪尾　満紀

◇第5回徳島県剣道選手権大会・全日本剣道選手権大会県予選

（7月25日(日)県警体）

▽準々決勝

玉　田　ココ　　鈴　木

（小松島支部）　（刑務所）

近　藤　コ　｜　メ　平　尾

（県警）　（県警）

延長2メ

平　野　ドコ｜　　白　木

（県警）　（名西支部）

岩　木　コ　｜　メ　吉田茂生

（県警）　（県警）

延長2コ｜

▽準決勝

近　藤　　玉　田

延長2メ｜

平　野　｜　　岩　木

延長　メ｜

▽決　勝

近　藤　　平　野

延長2メ｜

◇第47回徳島県中学校総合体育大会

（剣道競技）

（7月27日(火)鳴武）

【男子団体】

▽準々決勝

市　場　中　3｜2　阿南一中

富　田　中　3｜1　鳴門一中

阿　南　中　2｜1　海南中

相　生　中　3　2　高浦中

▽準決勝

市　場　中　3｜2　富田中

阿　南　中　2　2　相生中

（代表戦勝ち）

▽決　勝

市　場　中5(10)｜(2)0阿南中

○瀬　尾　コメ｜　　木村

○松　村　メメ一　メ　敦賀

○近　藤　メメ｜　　湯浅

○西　木　コメ　　ド　表原

○日和田　メコ｜　　横　手

【男子個人】

▽準々決勝

日　和　田　ココ｜　　岩　朝

（市場）　（鳴門一）

横　手　コメ　　三　木

（阿南）　（富田）

近　藤　コ　｜　　笠　井

（市場）　（鴨島一）

福　田　ド　　森　本

（鷲敷）　（文理）

▽準決勝

日　和　田　ココ一　　横　手

近　藤　コド一　　福　田

▽3位決定戦

横　手　コメ　　福　田

▽決　勝

日　和　田　メコ｜

近　藤

【女子団体】

▽準々決勝

那　賀　川　中　5｜0　入田中

日　和　佐　中　3　2　川内中

阿　南　中　5一0　穴吹中

市　場　中　5一0　山川中

▽準決勝

那　賀　川　中　5｜0　日和佐中

市　場　中　4　1　阿南中

▽決　勝

那　賀　川　中5(8)｜(0)0市　場　中

○大　坂　コ　　畑　山

○小　西　メ一　　野　口

○賀　川　メド｜　　大　森

○　芝　　メコ｜　　一　村

○坪　井　メコ一　　西　村

【女子個人】
▽準々決勝
坪井メド（那賀川）－野口（市場）
大谷メメ（川内）－福原（阿波）
西村メメ－メ（市場）－大坂（那賀川）
賀川ドメ－乾（那賀川）－（阿南一）
▽準決勝
坪井ド－大谷
賀川メ－西村
▽3位決定戦
西村ココ－大谷
▽決勝
坪井メメ－賀川
竜虎館2(4)－(1)1新野少
【個人】
▽順位 ①阿部純子（大野） ②賀出貴史（立江） ③富永誠二（国府）、近久真哉（上浦）

◇第13回四国教職員大会
（8月22日(日)中武）
▽順位 ①香川3勝 ②徳島1勝1敗1分（勝者16） ③愛媛1勝1敗1分（勝者14） ④高知0勝

◇第22回徳島県社会人剣道大会
（8月29日(日)鳴武）
▽準決勝
刑務所4(6)－(0)0徳島支部
小松島3(8)－(2)0板野東
▽決勝
刑務所2(6)－(2)0小松島B

◇第24回徳島県少年剣道錬成大会
（8月1日(日)鳴武）
【団体】
▽準々決勝 新野少3(3)－(2)1延野少、高浦少2(3)(2)2育英館、大野小3(6)－(1)0那賀川小、竜虎館4(5)－(0)0阿南少
▽準決勝
新野少3(5)－(0)0高浦少
竜虎館3(7)－(1)0大野小
阿南中 ③市場中
▽高等学校男子の部 ①城ノ内 ②富岡西 ③阿南工業
▽高等学校女子の部 ①富岡東 ②富岡西 ③川島
▽一般の部 ①小松島 ②阿南A ③振武館

◇第38回徳島県高等学校新人剣道大会
（11月21日(日)徳農体）
【男子の部】
▽準決勝
城ノ内5(8)－(2)0徳東工
富岡西2(4)－(2)1小松島
▽3位決定戦
徳東工4(7)－(2)1小松島
▽決勝
城ノ内2(2)－(1)1富岡西
○佐藤メ－山崎
弘田×藤崎
佐々木×森
泉－ド稲岡○
○近藤ド－賀川
【女子の部】
▽準決勝
富岡東5(7)－(1)0小松島
富岡西4(8)－(2)1川島
▽3位決定戦
小松島3(4)－(4)2川島
▽決勝
富岡東5(7)－(1)1富岡西
○陶木メメ－中野
○敷田コ－河野
○妹尾コ－高木
○前浦メ－島田
○猪尾ココ－メ大坂

◇第18回徳島県中学校新人剣道大会
（11月28日(日)鳴武）
【男子】
▽準決勝
阿南中3－1市場中
那賀川中0代表戦0阿南一中
▽決勝
阿南中2(5)－(3)1那賀川中
福島ド－メメ森○
○白浜コ－瀧口
敦賀×馬渕
○木村コメ－大坂
門田メ×メ青井
【女子】
▽準決勝
石井中2本数勝2那賀川中
相生中2代表戦2阿南中

▽決　勝

相　生　中2(4)－(1)0石　井　中
○原　田　メ　－　立　石
藤　崎　×　松　田
樫　本　×　武　知
岡　崎　コ　×　コ　毛　利
○福　永　メメ－　大　岡

◇第11回徳島県スポーツ少年団剣道大会兼第16回スポーツ少年団剣道交流大会徳島県予選会

（12月12日(日)鳴武）

▽小学4年生（男・女子）　①吉野宣哉（那賀川少）　②元木覚（龍虎館）　③山ノ井徹（錬武館）、森本隼徳（鴨島）

【男子】

▽小学5～6年生　①仁木進介（大野城山）　②大前智仁（大野城山）　③松岡尚（錬武館）、原遼介（那賀川少）

▽中学校　①仁木康太（大野城山）　②敦賀晋平（阿南少）　③住村深昌（小松島少）、福島聡仁（阿南少）

【女子】

▽小学5～6年生　①栗本美香（延野小）　②佐藤綾（那賀川少）　③沖津佐智恵（錬武館）、西条絵梨子（鴨島）

▽中学校　①平尾芙海（阿南少）　②服部茜（鴨島少）　③遠藤律子（大野城山）、竹内礼子（入田錬）

◇第3回全国高等学校剣道選抜大会県予選

（平成6年1月15日(土)徳農体）

【女子団体】

▽準決勝

富　岡　東5(8)－(0)0川　島
富　岡　西4(7)　(0)0小　松　島

▽三位決定戦

小　松　島3(5)－(5)2川　島
○榊　原　コ　－○○藤　嶋○
増　田
○谷　本　メコ－○○井　若○
喜　多
○大　城　メコ－　コ　正　木

▽決　勝

富　岡　東3(6)　(1)0富　岡　西
○陶　木　コ　－　中　野
敷　田　×　高　木
妹　尾　コ　×　メ　大　坂
○前　浦　コメ－　島　田
○猪　尾　メコ－　河　野

【男子団体】

▽準決勝

小　松　島3(5)　(2)2城ノ内
富　岡　西4(8)　(1)0徳　東　工

▽三位決定戦

城ノ内4(8)－(1)0徳　東　工
○佐　藤　ココ　近　藤
○弘　田　メ　－　木下健
佐々木　メ　×　メ　野　田
○泉　ココ－　木下貴
○近　藤　コメ　谷　口

▽決　勝

富　岡　西3(5)　(1)0小　松　島
山　崎　×　金　田
森　×　島　本
○藤　崎　コ　－　井　内
○賀　川　メコ　小　林
○稲　岡　メコ－　メ　木　村

◇第27回徳島県高等学校剣道選手権大会

（平成6年2月27日(日)鳴武）

【女子の部】

▽決勝トーナメント1回戦

猪　尾　コ　－　阿　部
（富東）　（生光）
前　浦　メ　延長　高　木
（富東）　（富西）
陶　木　メ　－　中　野
（富東）　（富西）
大　坂　メ　延長　妹　尾
（富西）　（富東）

▽準決勝

猪　尾　メ　延長　前　浦
陶　木　メ　延長　大　坂

▽三位決定戦

大　坂　メ　－　前　浦

▽決　勝

陶　木　メ　延長　猪　尾
（富西）　（富東）

【男子の部】

▽決勝トーナメント1回戦

近藤正　コ　富　永
（城ノ内）　（城ノ内）
近藤友　メコ－　高　濱
（徳東工）　（川島）
山　崎　コメ－　野　田
（富西）　（富東）
泉　メコ－　賀　川
（城ノ内）　（富西）

▽準決勝

近藤正　メメ－　近藤友
泉　コ　－　大　坂

▽三位決定戦

山　崎　メコ　近藤友

▽決　勝

近藤正　メ　－　泉

## 〔県外〕

◇四国四県剣道大会

（5月23日(日)香川県立武）

①徳島　②香川　③高知　④愛媛

◇平成五年度第39回（男子）・第27回（女子）剣道選手権大会

（6月19日(土)～20日(日)松山市）

【男子団体】

▽予選Aリーグ　①高松南　②丹原　③城ノ内　④土佐

▽予選Bリーグ　①琴平　②松山聖陵　③明徳義塾　④川島

▽予選Cリーグ　①宇和島東　②尽誠　③小松島　④山田

▽予選Dリーグ　①高知　②高松商　③富岡西　④西条

【女子団体】

▽予選Aリーグ　①宇和島東　②高知　③富岡西　④高松西

▽予選Bリーグ　①高知商　②高松南　③聖カ女子　④川島

▽予選Cリーグ　①高松商　②岡豊　③城ノ内　④松山北

▽予選Dリーグ　①富岡東　②南宇和　③明徳義塾　④高松北

▽準決勝

高知商3(3)－(1)1宇和島東

富岡東3(4)－(1)1高松商

▽決勝

高知商3(3)－(3)2富岡東

○山下メ－猪尾

○宮地メ－陶木

前田－コメ酒巻○

野久保　メ楠○

○福留メ－大城

【女子個人】

▽1回戦

猪尾ココ－恒石（富岡東）

大城メメ－藤原（明徳義塾）

▽2回戦

猪尾メ－洲本（高松南）

大城メメ－佐藤（高松南）

▽3回戦

猪尾コ－福留（高知商）

大城メ－山下（高知商）

▽準決勝

行天メメ－コ猪尾（高松南）

友澤メコ－コ大城

◇平成五年度全国高等学校総合体育大会第40回記念全国高等学校剣道大会

（8月2日(月)～4日(水)栃木県那須町）

【男子団体】

▽予選リーグ　鹿児島実業3(6)－(2)1城ノ内、城ノ内2(4)－(4)2上宮（城ノ内予選落ち）

【男子個人】

▽1回戦　川添（小松島）メ－松下（岐阜農林）、松村（小松島）メメ－古川（佐賀龍谷）

▽2回戦　兼子（日大山形）コ－川添、野々瀬（近代附属）ド－松村

【女子団体】

▽予選リーグ　富岡東5(10)－(1)0橘（神奈川）、富岡東3(4)－(2)1久御山（京都）

▽決勝リーグ1回戦　富岡東3(4)－(3)2高千穂（宮崎）

▽準決勝

西大寺3(5)－(5)2富岡東（岡山）

【女子個人】

▽1回戦　大城（富岡東）メ－佐藤（神奈川）、酒巻（徳島東）メコ－花澤（静岡）

▽2回戦　大城メ－太田（青森）、酒巻－メ渡邊（神奈川）

▽3回戦　大城－コ松尾

◇第10回全国家庭婦人剣道大会

（8月3日(日)日本武）

▽予選リーグ

徳島0(0)－(5)3北海道

木村コメ栄花○

手塚×越後

長谷川－メ谷田○

服部－メメ江刺○

中尾×山本

徳島0(2)－(9)4大分

木村コメ中島○

手塚コ×メ東名

長谷川－メコ足達○

服部－メメ矢野○

中尾ド－メコ城内○

◇第23回全国中学校剣道大会

（8月23日(月)～24日(火)京都市）

【男子団体】

▽予選リーグ

下館南2－1市場（茨城）

清風4－0市場（大阪）

【男子個人】
▽1回戦
近藤メ－平野（市場）（広島）
▽2回戦
池田メ－近藤（茨城）
日和田ココ－八巻（市場）（宮城）
▽3回戦
北川メ－日和田（京都）
【女子団体】
▽予選リーグ
那賀川2－2崎返（徳島）
那賀川5－0足羽一（長崎）（福井）
▽決勝トーナメント1回戦
那賀川2(2)－(2)2野田（埼玉）
代表戦勝ち
○大坂コ－酒井
小西×庭山
賀川－メ吉川○
芝－メ柳田○
○坪井コ－沖
▽準々決勝
京陵2(3)－(1)1那賀川（熊本）
有働×大坂
○丸吉メコ－小西
上橋×賀川
○楢林コ－芝
藤野－コ坪井○
【女子個人】
▽1回戦
賀川コ－堀岡（那賀川）（神奈川）
久保田コ－坪井（熊本）（那賀川）
▽2回戦
賀川メ－石井（兵庫）
▽3回戦
賀川メ－登（神奈川）
▽4回戦
興梠コメ－コ賀川（宮崎）

◇第39回全日本東西対抗剣道大会
（9月19日(日)横浜市）
29将　近藤メコ下島（岐阜）

◇第41回全日本剣道選手権大会
（11月3日(祝)日本武道館）
▽1回戦　立神（兵庫）メ－近藤

◇第4回全日本剣道七段大会
（11月14日(日)盛岡市）
▽1回戦　権瓶（新潟）メ－米倉

◇西尾市制40周年記念第十回全国剣道連盟対抗剣道優勝大会（第49回国民体育大会剣道競技リハーサル大会）
（11月28日(日)西尾市）
▽2回戦
徳島2(5)－(3)1千葉
平尾－コメ染谷○
○白木メメ－斎藤
鈴木×花島
藤本メ×ッ軽米
○近藤メコ－中西
・戦評
今年度の国体開催県徳島と長崎に圧勝した千葉の対戦である。先鋒染谷は長身を利して跳込面を決め続いて小手を決め二本勝ち。次鋒戦は力強い打ちから白木が面を二本連取し1対1とした。中堅戦は、今一つ思い切った技が出ないまま引き分け。副将は、徳島の藤本の出頭を突き、本で軽米が先取するも、藤本が退き面を返し引き分け。息詰まる接戦は大将戦になった。上段の中西は前へ出て小手、面と打つが決まらず、徳島近藤が一瞬の隙をつき、小手と面を連取し二本勝ちし勝負を決めた。
▽3回戦
徳島3(6)－(3)2静岡
○平尾メメ－松本
○白木コメ－鈴木
鈴木－メメ小山○
藤本－メ二橋○
○近藤ド－松下
・戦評
ともに2回戦を接戦で勝ち上がってきた両チーム。徳島の先鋒平尾は間合いをうまくつめて面を先取、続いて捨て身の面で2本目もとる。次鋒白木は相手の動きをよく見て2本連取する。2対0となり徳島のリードなる。中堅戦は2回戦代表者戦で競り勝った静岡の小山は得意の面で2本勝ちとなる。続く二橋も1本勝ちし2対2で大将戦にもちこむ。気迫十分な徳島近藤は胴面を決め3対2で準決勝へ駒をすすめた。

▽準々決勝

徳　島　2(5)－(4)2　京　都
平　尾　－メメ　高　橋○
○白　木　ココ－　遠　山
○鈴　木　メメ－　川　崎
藤　本　－メ　葛　田○
近　藤　コ×メ　藤　元

・戦評

準決勝進出をかけた京都と徳島の強豪同士の対戦である。先鋒戦は両者慎重に試合を始めた。平尾がタイムを取った後、高橋が遠間から鋭い面を決める。次に平尾の小手打ちを返して面に決め2本勝ち。次鋒の白熱した一戦は数分後白木の攻めに遠山が出ようとするところを小手2本連取し、白木が勝った。中堅鈴木は積極的に技を出し退き面と面を取り流れを徳島に導いた。副将葛田は藤本の小手打ちを払って面を決め1本勝ち、大将戦となった。逆転したい藤元は積極的に前へ出て攻めるも、近藤の面と藤元の小手の1本ずつの引き分けとなり徳島が接戦をものにした。見ごたえのある好試合であった。

▽準決勝

神奈川　3(8)－(4)1　徳　島
○冨　田　メコ－　平　尾
○有　馬　ココ－メ　白　木
高　野　コ　メメ　鈴　木○
○宮　崎　メコ－　藤　本
伊　藤　メ×コ　近　藤

・戦評

今年度国体3位の徳島、全日本選手権大会3回優勝の宮崎を副将とする神奈川との好勝負。先鋒神奈川の冨田は終始鋭く攻め退き面、小手と取りまず1勝、次鋒徳島白木は十分に攻め神奈川有馬が打って出るところを面で先取するが、有馬も豪快に上段より攻め小手を2本連取、中堅徳島の鈴木は神奈川高野に小手を取られるが面を2本連取し挽回のチャンスを迎える。副将宮崎は立ち上がり数秒自信に満ちた見事な面、次いで押さえ小手を決め全日本覇者の貫禄十分。神奈川有利なうちに決勝へ駒を進めた。徳島県の戦い振りも見事であった。

◇第14回中倉旗争奪剣道選手権大会

（12月5日(日)くにたち市）

▽2回戦　平野ド－　伊藤信介（中央）

▽3回戦　平野コメ　カーデス・マースタン（アメリカ）

▽4回戦　平野コ　木下博文（岐阜）

▽準々決勝　平野メ　田英雄（広島）

▽準決勝

平尾　泰（警視庁）メメ　平　野

◇平成六年四国管区内剣道選手権大会

（3月3日(木)四管警学校）

○30歳未満

▽決　勝

山　原（香川）メ－　岩　木

◇第48回国民体育大会秋季大会

小松島市立体育館（小松島市10月25日(月)～26日(火)〈少年男子・女子〉

城北高等学校体育館（徳島市10月27日(水)～28日(木)〈成年男子一部・二部〉

【少年男子】

▽2回戦

徳　島　3(7)－(5)2　石　川
○佐　藤　メメ－コ　表　克
近　藤　メ　メメ　塘　○
川　添　－コ　宮　田○
○泉　ドコ－メ　野　口
○松　村　ドメ　村　井

・戦評

開催県として苦しい練習に耐え今日の試合にのぞんだが、先鋒は先ず一勝、次鋒・中堅と痛い星をおとし副将で苦戦して対に持ち込み大将戦。胴・引面で辛勝し会場ハラハラさせられた試合だった。徳島の堅持が感じられた一戦だった。

▽3回戦

徳　島　3(3)－(4)2　福　岡
○佐　藤　メ－本　多
○近　藤　ド－松　岡
川　添　－ココ　山　本○
泉　メメ　天　野○
○松　村　メ　久木原

・戦評

福岡は栃木、山形を共に3対1、徳島1回戦不戦、2回戦石川を3対2で破り、3回戦、準決勝を目指しての激戦が展開される。先鋒気迫のこもった激戦、延長3回の末佐藤の面が決まり先ず一勝、次鋒も延長一回近藤の逆胴が決まる。中堅は山本の気合十分、甲手2本勝。副将天野、長身を生かし面2本、大将松村延長

のすえ引き面が決まり、徳島準決勝進出を決める。福岡の惜しまれる勝負だった。

▽準決勝

徳　島　3(6)　(4)2　鹿児島
○佐　藤　メッ　ー　メ　久米村
○近　藤　コ　ー　　増　田
川　添　　ー　ド　馬　場○
泉　コ　ー　メメ　川　中○
○松　村　コメ　ー　　上　村

・戦評

2回・3回戦と薄氷の勝利の徳島と、今大会順当に勝ち進んだ強豪鹿児島との対戦。観衆の目が一点に集まり静かであった。先鋒佐藤退面先取、佐藤の居つい所久米村面に跳び対、注目先鋒戦は延長の末、一瞬佐藤突きで勝つ。次鋒近藤波に乗れるか、近藤小手を取り王手がかかる。ここで中堅馬場、延長2回の末、抜き胴決まり望みを副将に託す。副将川中見事な踏ん張りを見せ延長の末、面で対と持ち込む。徳島チーム一戦一戦苦しい戦いが続く。大将戦の決着は？　立ち上がりに松村小手に跳び王手となり、2本目面で決勝進出を決めた。鹿児島チームこれまで健闘、今大会を盛り上げてくれた。ここに惜しみない拍手を送りたい

▽決　勝

佐　賀　3(6)－(3)2　徳　島
八　木　　ー　メ　佐　藤○
古　川　　ー　メド　近　藤○
○増　本　コメ　　川　添
○　境　メコ　ー　　泉
○久　世　メメ　ー　　松　村

・戦評

今大会緒戦から注目していた神奈川が佐賀に敗れ、素晴らしい健闘で佐賀決勝進出となる。ここまで大会を盛り上げ且つ勝ち抜いた両チームに惜しみない感謝の気持ちを送りたい。稽古量充分の両チーム、思い切った技を出し合ってほしい。先鋒の一戦、激しい打ち合い互いに譲らず延長の末、佐藤、面に決めた。次鋒近藤よく頑張り、胴・面と連取、早くも徳島有利に展開、これからが勝負。佐賀中堅増本、出小手・面と2本決め雲行きが変になる。続く副将泉思わぬ2本負け、勝負は振り出しに戻る。大将久世機先を制する退面を決め、勝利の女神は一体どちらに。佐賀優勢、久世2本目面で決着する。会場から佐賀の優勝、徳島の健闘に拍手が止まない。本当におめでとう。徳島も悔いなし、善戦した好試合だった。

【少年女子】

▽2回戦

徳　島　4(7)－(4)1　広　島
○猪　尾　メコ　　コ　長谷川
○陶　木　ココ　ー　　佐々木
楠　　コド　平　本○
○酒　巻　メメ　ー　コ　北　村
○大　城　メ　ー　　石　原

・戦評

開催県として観衆の注目を集めた一戦であった。先鋒・次鋒と連勝し中堅楠につなぐ。強豪広島の面目にかけてもと平本果敢に攻め2本勝ち。副将酒巻、優秀選手の経歴を持つだけに見事な面2本を決め、チームを勝利に導いた。敗れたとはいえ、広島の理詰めの剣道は賞賛に値するものであった。

▽3回戦

大　分　3(6)－(5)1　徳　島
森　迫　　ー　コメ　猪　尾○
○坂　本　コメ　　メ　陶　木
○井　上　メド　　メ　楠
○三　代　メコ　ー　　メ　酒　巻
長　木　　×　大　城

・戦評

地元の期待を担い準決勝を狙う徳島、強豪を破り三回戦に挑む大分との対戦、立ち上がりから激しい技の応酬となる。徳島の先鋒猪尾、跳込み面、出小手と先取し幸先のよいスタートを切る。次鋒戦、大分の坂本2本勝ちをし対となる。勢いにのった大分中堅、続いて2本勝ちをおさめる。注目の副将戦、徳島の酒巻にアクシデント発生、応急処置後再開するも小手を取られ、大分の準決勝進出となる。期待の酒巻の事故は徳島にとって不運の一語につきる。大将大城の健闘にも拍手を送りたい。

【成年男子一部】

▽2回戦

徳　島　5(10)　(0)0　沖　縄
○飯　田　メメ　ー　　照　屋
○平　野　ドコ　ー　　宮　良
○近　藤　コド　　親　川
○美　馬　メメ　ー　　嘉　数
○大　澤　不戦勝　　山　城

・戦評

開催県徳島が観衆注目の中に地元の意地を見せた一戦であった。各選手2分以内に2本勝を取める一方的試合展開となったが沖縄県の各選手も打つべき好機を確実に押さえる手堅い試合ぶりで善戦健闘した。大将戦が見られなかったのは残念である。

▽3回戦

徳　島　3(6)－(3)2　千　葉
○飯　田　メメ－　　小　島
○平　野　コ　－　　染　谷
近　藤　　メ　西　山○
美　馬　コ　－メメ　鈴　木○
○大　澤　コメ－　　中　島

・戦評

千葉は岐阜、岩手を破り、徳島は一回不戦、二回沖縄を5対0、共に破竹の勢いで優勝街道を進む。先鋒飯田面2本を決めて先ず一勝、次鋒延長3回平野の甲手で2勝、中堅延長3回西山の面、副将双方1本宛をとり鈴木の面で対となり、大将戦にもつれ込む。大将大澤甲手、面と連取し双方追いつ追われつの白熱した試合運びとなり、徳島苦しい戦いを制して4回戦に駒を進める。千葉の善戦をたたえたい。次鋒戦、今一つ気迫がほしかった。

▽4回戦

徳　島　3(6)－(4)2　埼　玉
○飯　田　ココ　　菊　地
平　野　－　メ　大　澤○
○近　藤　ド　－　　加治屋
美　馬　コ　－メコ　山　中○
○大　澤　ココ－　メ　野　澤

・戦評

地元と対する本大会屈指の強豪埼玉戦、白熱した試合展開となった。先鋒飯田立上がり小手に跳んで先取、2本目も小手と連取、相手上段ものともせず機先を制す、立派の一言。次鋒平野積極性を欠き面を決められ対となる。中堅戦互いに剣先のきいた攻防鋭く延長に入る。きびしい稽古をつんだ両選手、隙がない。観衆固唾をのむ戦いが続いたが、一瞬近藤の退胴決まり王手となる。副将山中上段から小手先取、美馬すぐ小手でお返し対となるが、退き面に倒れる。予想通り熱戦は決着を大将戦に託した。大澤小手先取、野沢面に返して対、息詰まる場面、勝利の女神は？　場内静か、目は1本に集まる。勝負強い大澤の小手で決着、埼玉惜しい星を落とす。

▽準決勝

大　分　3(4)－(4)2　徳　島
堤　　－　メ　飯　田○
○加　藤　メコ　　ド　平　野
田　島　－メメ　近　藤○
○大　東　コ　－　　美　馬
○青　木　コ　－　　大　澤

・戦評

互いに混戦を粘り強く戦って来た開催県徳島と大分との決勝戦進出をかけての一戦となった。先鋒戦は互いに激しい攻防戦の中、飯田選手鮮やかな跳込面が決まり幸先よいスタートを切った。次鋒戦は長身同士の遠間からの攻防で互いに胴と面を取り合い延長の末、加藤選手が出小手を決め対とする。中堅戦は試合開始早々近藤選手が鮮やかな面二本を連取し王手をかける。副将戦は近間からの打ち合い、一瞬大東選手の小手が決まり大将戦となる。大将戦は八段同士の対決で互いに激しく打ち合うも決め技なく延長となり、青木選手が出小手を決め勝負を決した。気迫あふれる一進一退の好試合であった。

▽3位決定戦

徳　島　3(6)　(5)2　東　京
飯　田　　メ　寺　地○
平　野　－　メコ　田　島○
○近　藤　メメ－　メ　出　水
○美　馬　メコ－　メ　梯
○大　澤　コメ　　竹　村

・戦評

大分に惜敗した徳島、神奈川に涙をのんだ東京、3位目指して激烈な先鋒戦が始まる。強烈な技の応酬相譲らず延長3回好試合となるも、きびしい面で寺地1勝。次鋒戦、田島小手・面と連取、東京早くも有利な形となり徳島苦しい。中堅共に譲らず出水の退面決まるも、すぐ近藤面と返して延長となり緊張の一瞬近藤面と切る、意地を見せた一戦だった。副将美馬気の抜けたところ豪快に面をとられ雲行き悪し。ここで美馬小手二本で五分に持ち込む。大将大澤得意の小手・面と連取、見事な逆転勝利で拍手が止まぬ徳島の3位だった。

【成年男子二部】

▽1回戦

徳　島　2(3)－(1)1　広　島
○玉　田　メコ　－　　中　西
　鈴　木　　－　メ　野　依○
○那　倉　メ　－　　山　本

・戦評

先鋒互いに気合充実、技の応酬互いに譲らず鍔りからわかれ際、玉田退き面を決める。中西激しく挽回を狙うが決まらず、玉田の小手で玉田の勝ち。中堅鈴木幾分硬さが見える、広島野依面に跳んで1対1となり大将戦となる。大将那倉の上段に対し山本攻めにくい、互いに譲らず一瞬那倉の面豪快に決まり、徳島の勝ち。

▽2回戦

徳　島　3(4)－(1)0　新　潟
○玉　田　メ　－　　藤　塚
○鈴　木　メコ　－　メ　竹　内
○那　倉　コ　－　　白　井

・戦評

山形を倒して波に乗る新潟と優勝のプレッシャーのかかる徳島との白熱した試合展開となる。先鋒激しい技の応酬となり延長の2回目、思いきった退き面が決まり先ず一勝。中堅鈴木面をとられたが直後、面と退き甲手で2勝。大将那倉上段から甲手を決め3対0で準決勝進出。手に汗をにぎる好試合だった。

▽準決勝

徳　島　2(3)－(0)0　兵　庫
○玉　田　コ　－　　田　島
○鈴　木　メメ　－　　長　友
　那　倉　　×　　辻

・戦評

成年二部準決勝戦は、先鋒互いに隙を見せず息詰まる接戦を展開し延長戦となる。玉田痛烈な小手を打って口火を切った。中堅鈴木、長友の打って出るを抜いて大上段からの面、更に駄目押しの面をとって勝負を決める。大将那倉上段より攻め、辻も良く応戦したが共に決定打なく引き分けに終わる。徳島が決勝戦進出を決めた一戦である。

▽決　勝

徳　島　3(4)－(1)0　東　京
○玉　田　メド　－　メ　出　崎
○鈴　木　メ　　　　太　田
○那　倉　メ　　　　朝　内

・戦評

強豪東京都チームと厳しい強化に耐えてきた徳島県チーム、共に苦難を乗りこえ勝ち進んできた両チームの優勝をかけた注目の一戦は、気迫充分の見ごたえのある好試合であった。結果は徳島玉田の2本勝、続いて中堅鈴木の1本勝、大将戦はお互いに一歩も譲らぬ気迫の接戦を展開したが、那倉の上段よりの面を決め完勝する。地元県民の期待に応えた選手はもとより、よく善戦した東京都の選手への温かい拍手が送られていた。

# 編集後記

▽　期待と不安の入りまじった中、第48回国民体育大会剣道競技が10月25日（月）小松島市立体育館において開催された。開始式後、公開演武打太刀教士七段　坂下彦之、仕太刀教士七段　松村克隆の両名による日本剣道形が行われた。

第一試合場少年男子、第二試合場少年女子、試合は同時に開始された。本県選手は第二回戦より出場、男子は山口に3－2で勝ち上がった石川と対戦、大将戦にもつれこんだが大将松村芳紀（小松島高）よく踏ん張り2本勝ちを収めた。女子は岩手を5－0で下した広島と対戦4－1と難なく勝ち初戦を突破し、男女ともベスト8に進出した。

▽　26日（火）第二日目

少年男子準々決勝は山梨を3－1で破った福岡、準決勝は埼玉を4－1で破った鹿児島、決勝戦は神奈川を4－1で破った佐賀と対戦した。初戦から決勝戦まで大将戦という難しい戦いであったが、二位に入賞した。

少年女子準々決勝は大分と対戦したが、突然のアクシデントに見舞われ敗れたが五位に入賞した。少年男女チームに対し会場から惜しみなく拍手が続いた。総合優勝に向け第三日よりの成年一部二部の活躍に期待が集まった。

▽　27日（水）第三日目

成年男子は、会場を徳島市城北高等学校体育館に移し、開始式、引き続いて公開演武打太刀範士八段　堀江幸夫、仕太刀教士八段大澤孝彰両先生の日本剣道形の後、第一第二試合場とも成年一部より試合が開始された。

第一回戦は広島1－1の大将戦となり、大将那倉よく頑張り面をとって準々決勝に進出した。

準々決勝は山形に2対1と勝った新潟に3－0と快勝した。

成年一部は、一回戦より出場、一回戦を3－2で破った沖縄と対戦、これに5－0で快勝、3回戦へと進出した。

▽　29日（木）第四日目

成年一部の第二回戦開始された。徳島の対戦相手は岩手を3－1で下した千葉。接戦のすえ大将戦で3－2で下した。準々決勝は埼玉を大将戦でものにし、準決勝に進出した。準決勝は大分に3－2で惜しくも敗れてしまった。

3位決定戦は強豪東京を大将戦をものにして3－2で破り、3位が決定した。

成年二部準決勝は兵庫を2－0で破り決勝に駒を進めた。

決勝戦は強豪東京、接戦のすえ3－0で優勝。期待どおりの総合優勝を成し遂げることができた。

この成果は県剣道連盟はじめ関係者の努力の結果と思います。

アドバイザーコーチの佐藤博信先生には誌上をお借りしてお礼申し上げます。

その他、成果を挙げた大会もありましたが、割愛させていただきます。編集後記に成っておりませんがお許しをお願い致します。

（松村克隆）

発刊日　平成六年五月三十一日
発行所　徳島県剣道連盟
編　集　徳島県剣道連盟広報部
印刷所　グランド印刷